



図書館とランドスケープ

日時 2019年11月11日(月) 13:30~16:30

会場 日比谷図書文化館内(地下1階)
日比谷コンベンション大ホール

主催 株式会社 未来の図書館 研究所

プログラム

13：30～13：50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

永田 治樹 (未来の図書館 研究所 所長)

13：50～14：30 【講演】「図書館から広がる地域おこし

那須塩原市の未来を考える」

伊藤 麻理 氏 (UAo 株式会社 代表取締役)

14：30～15：10 【講演】「デジタルアーカイブにおける情報の

ランドスケープ」

森山 光良 氏 (日本図書館協会認定司書 1029号)

15：10～15：30 休憩

15：30～16：30 ディスカッション

●パネリスト 伊藤 麻理 氏

森山 光良 氏

●コーディネーター 永田 治樹

シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

こんにちは。未来の図書館研究所長の永田治樹と申します。ひとことご挨拶を申し上げます。おかげさまでこのシンポジウムも今年で第4回目を迎えました。ひとえに皆さまのご協力、ご支援の賜物だと存じております。早いもので、本研究所も一つの節目となる3年が過ぎてしまい、今年4年目となっております。日々のあれこれに忙殺されているばかりでなかなか思うようにはことは運ばないのですけれども、これからもこのようなシンポジウムを皆さまと共に開催していきたいと思っています。今後ともどうかご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。簡単ではございますがご挨拶にかえさせていただき、私はこの会合のコーディネーターでもありますので、ここからその役割を務めます。

少しスライドを使い説明いたしますので、座らせていただきます。本シンポジウムの構成は、まずは私から20分足らず、その趣旨についてお話をいたしまして、そのあと、こちらにお座りのお二方のパネリストからお話を頂戴します。そして、間に20分程度休憩いたしまして、その後ディスカッションを1時間という構成にいたしたいと考えております。

本日のテーマは、スライド(図1)に映しているように「図書館とランドスケープ」というテーマでございます。タイトル画面の画像は、ご存じの方も多いと思いますが、福島県白河市の図書館の外観です。JR白河駅の近くにありまして、小峰城という城郭を臨む見晴らしのいいところにあります。設計者の説明には、「地域のコンテクストを意識して開口部を定め、季節・時間の変化を感じられる滞在型の図書館となること、開放的なランドスケープとして市民に開かれた活動・交流の場となることを目指した」とありました。この図書館では、外も内もなかなか良質なランドスケープを味わうことができます。



図1 白河市立図書館

そこで今回のシンポジウムが、なぜこのテーマであるか、そしてこのテーマでなにをみるかという点を少し説明させていただきます。スライドの写真（図2）は2018年12月4日に開館しましたフィンランド、ヘルシンキの中央図書館 Oodi です。今年（2019年）の IFLA、世界図書館連盟の大会で Public Library of the Year を受賞しました。全体は1万平米ほどの大きな建物です。この写真の部分は3階、最上層階の光景であります。図書館の基盤エリアといってもいいですが、それを右端からと、左端から撮ったものです。右側の写真が成人のエリアから撮ったもので、左側の写真が子どものエリアから撮ったものなので、両方合わせると3階の空間がつながるのですが、真ん中にカフェがあって、また外にはテラスがあります。とても優れたアコースティックで、子どものエリアがあったりカフェがあったりするのですが、ざわつきもなく、人々が思い思いに自分の素敵な時間を過ごすことができる図書館です。



図2 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

さて、ランドスケープとはなにかという問いをまずはクリアにしていきたいと思います。

日本では当初植物学とか地理学とかいった領域で導入された概念です。同じ意義のドイツ語 *landschaft* という言葉がありますが、それと同じく景観と訳したようですね。その後建築学とか、あるいは造園とか都市計画などの分野で広く使われるようになりました。ランドスケープとは、「土地や地形といった自然的な要素と、人工の要素の部分をあわせて全体として目にみえる特徴」をいっていると思います。景観という日本語でもいいのですが、日本語の場合、言葉が少しスタティックになってしまうといいますが、静止したイメージになってしまうので、そのもっている機能的な意味を失わないためにカタカナを使っています。ランドスケープとはなにかということですが、自然と人工物が合わさった全体としてみたときに、みえてくるものということですね。スライドの写真は、単なる一つのランドスケープ写真です。フランスのアルビというまちの、タルム川という河畔につくられた庭の写真です。

さて図書館にとってのランドスケープを文献で少しどってみますと、実に古い歴史があるようで、これは建築家のピーター・ジソルフィー（Peter Gisolfi）という人が書いたペーパーで拾ったのですが、ローマ時代のキケロの手紙のなかにこんな文句があるといわれています。「もしあなたの図書館のなかに庭があるなら、なにも欠けたところはない」。図書館では読書だとか思索だとかあるいは執筆だとか、さらにその過程のなかで同僚と会話することもある。そのためには庭といったランドスケープが不可欠であるとキケロはいつているのだとジソルフィーは指摘しています。

中庭をもっているような図書館は、いろんなところにあるとは思いますが、彼は典型的な庭がある図書館として、ニューヨーク公共図書館を挙げていました。「えっ、図書館のなかじゃないよ」と思われる方も多いでしょうが、スライドの地図のように図書館の裏にブライアント公園というのがあります（実はこの庭の地下は書庫になっています）。かなり大きな公園で、そこには花壇もありますし、レストランやカフェもありますので、人々がくつろげるということで、図書館の閲覧室を抜け出して公園へ行けば、公園のランドスケープを楽しめるというわけです。

庭によって人は安らいだり会話を弾ませたりすることができる。つまり庭というランドスケープが、視覚を通して人々に働きかけてくるというわけですね。ランドスケープから「いい眺望だ」と、人々は感動を受けたりします。あるいはそのランドスケープがもつ意味や価値を汲み取ることができ、それを自分の行動に結びつけるというようなことにもなります。

ちょっと話が違いますが、アメリカの心理学者でジェームズ・ジェローム・ギブソン（James Jerome Gibson）という人が、アフォーダンスという言葉を取り上げています。アフォーダンスというのは、環境が動物あるいは人に働きかけるということです。人を取り巻くランドスケープもそのように私たちに作用するのです。図書館のランドスケープは、一つに図書館の景観として、自然景観、地域の景観、そして建築家の設計による側面からみてとれます。それにもう一つに、図書館が情報を提供するという役割に注目すると、図書館のランドスケープでは情報の景観という観点を取り出せます。したがって私は、図書館のランドスケープという議論は二つの観点でできるかなと考えました。

スライドは、またこれも有名なストックホルムの市立図書館の写真です。圧倒的なこの壁面の蔵書、この様相に対峙して私たちはどんな気持ちになるか、どんな感情がひき起こさせられるでしょう。通常は、蔵書のもつ知的な活動に誘われるかと思います。

さて、なぜ今ランドスケープなんかを問題にするのかを少し説明させてください。これを取り上げるようになった理由は、近年わが国の公共図書館でも、1970年代につくられた座席の少ない貸出図書館から、ちょっと言葉は古いけれども滞在型の図書館に変更され、安らいだスペースが望まれるようになりました。改めてこの側面を強く意識し始めています。図書館により快適な空間が求められ、また人々が集える要素が求められている。これが第一の理由です。

もう一つは、先ほども少し申し上げましたが、情報の景観が資料のデジタル化によって、実は物理的には捉えられなくなっていますね。電子的な資料はこれまでのように書架には並べられません。本と同じようにはランドスケープを構成しません。だから新たな図書館のなかの情報景観をどのようにつくっていくかということも、留意しなければならないというのが第二の

理由であります。

図書館のランドスケープをどう設定するかが、今回のシンポジウムのポイントです。本日みつけたいところは3点あります。図書館のランドスケープをどうつくるかは、図書館がどのような役割を果たすのか、ということによって決まるのですが、図書館は単なる公共貸本屋のような役割ではなくて、人々の学びや交流や、あるいは気晴らしの場でもあります。そのような図書館のあり方を踏まえて、設計のランドスケープを構想します。その部分について今日は建築家の伊藤麻理さんに、どのようにランドスケープを構成されたかの実際を語っていただけることになっています。

スライド(図3)は、デンマークのオーフスの市立図書館の写真です。全体が斜面の空間、2階から3階にかけてランプがつくられています。ここに、5面のイベントスペースがあります。左右にジグザグになっているスロープは、ベビーカーを通すためです。で、5面それぞれでもイベントができるし、全体を一緒にしてもイベントができるようになっています。私もこの画像をみてなんだろうと思っていました。こういうイベントスペースが、図書館の中央部分にあるのです。一体この図書館はなにをしているのだろうと思ひまして、この夏に調査にしてみました。

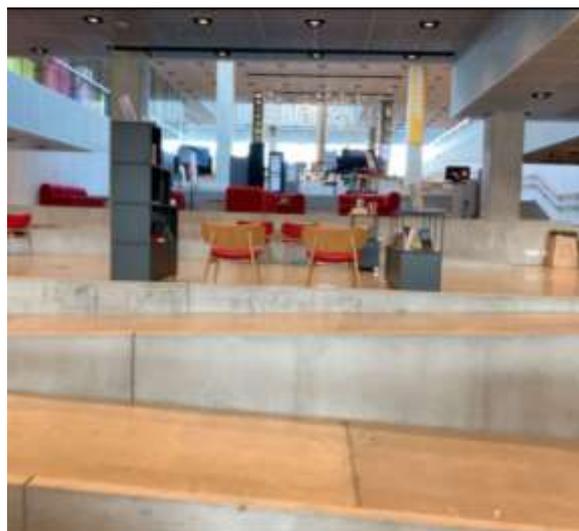


図3 オーフス公共図書館 Dokk1 のランプ

これは、市民がさまざまな活動、イベントを開くためのものでした。それが図書館の中心部分で行われる。そのように人々のイベントを位置づけているということでもあります。実はこのような市民活動を支える設計と、コミュニケーションセンターとしての機能が評価されまして、ヘルシンキ中央図書館に先立つ2016年のIFLAのPublic Library of the Yearをこの図書館が受賞しています。

先ほどは、図書館のランドスケープを二つに分けて説明したのですが、二つの区分ですと両方にまたがる部分がある。単に居心地のいい空間というのではなく、読書や活動するのに適合している空間、つまり図書館の機能を果たすのに居心地のいい空間であり、同時に図書館の情報を提供するのによい空間、つまりコレクションそのものを利用しやすく並べるかといった問題があります。そういう中間領域があります。サービスやコレクションのためのしつらえですね。

これは最初の伊藤さんのところにも関わるし、次の森山さんのところにも関わるのです。図書館としては、サービスとコレクションのしつらえという局面も考えなければならない。資料をどう展示するか、資料をどのように発見させるかというところを考えなければならないということです。スライドは、高知県の梶原町立図書館の写真です。この梶原図書館はとても素晴らしい図書館です。隈研吾さんの設計でこの内部のコレクションのしつらえをプロデュースしたのは、一昨年私どものシンポジウムにご登壇いただいた太田剛さんです。今日は太田さん

にいらっしやっただいておりますので、あとでちょっとご発言をお願いするつもりです。

三つ目は、先ほど説明しましたように、ランドスケープは物理的な景観だけでは不十分になってきました。インフォメーションランドスケープという言葉が 20 世紀の終わりくらいに使われ始めました。どういうコンテキストかというと、物理的な資料とデジタル資料が混じった図書館、ハイブリッドライブラリーという概念はご存じかと思いますが、そういう図書館になっていきますと、ある種の領域は本当に電子化してしまうのですね。日本の公共図書館ではまだみえてきませんが、大学などの学術図書館に行きますと、雑誌の棚がガラガラになっています。電子図書もかなり増えて、電子図書、電子ジャーナル、電子マガジンが多くなってくると図書館の様相が変わってくるのです。わが国の公共図書館はそういう意味ではかなり状況が出遅れているのですけれども、そういうことが予想されます。そういう状況になった場合、情報をどのように可視化するかという問題が出てきているわけです。

それに関して、日本では珍しく公共図書館でもこのあたりのことを先進的に取り組まれた岡山県立図書館がありますが、その岡山県立図書館でこの 3 月まで働いていらっしやった、森山さんにこのあたりのお話をさせていただこうと思います。

以上が本日のシンポジウムの趣旨であります。早速お二方にお話をお願いしたいと思いますが、伊藤さんと森山さんについて少しご紹介をいたします。

伊藤さんは大学で建築学を修めた後、オランダに渡って経験を積まれ、その後 UAo という会社を設立され、その代表をなさっていまして、建築とランドスケープの融合を目指して活躍されていらっしやいます。図書館についても大変深い理解をもって取り組まれておりますし、昨今では、Web で拝見したのですが、民間資金を活用した官民連携による社会解決の仕組みとして、SIB (Social Impact Bond) というものにも取り組まれていると聞きました。大変楽しみな若い世代の方です。

一方森山さんは、国立国会図書館に勤務された後、岡山県立図書館で長らくお仕事をなさっておられた方で、岡山のデジタル図書館「デジタル岡山大百科」というものがあるのですが、その事業を立ち上げられて、その発展にご尽力なさいました。岡山県立図書館は、実は県立図書館ではとても活動が活発な図書館で、県立図書館としては全国一貸出が多いとかいろいろあるのですが、こうした先進的な取り組みをなさっている図書館です。

それでは、伊藤さんのご発表をお願いしたいと思います。

【講演】「図書館から広がる地域おこし 那須塩原市の未来を考える」

(伊藤)

UAo 株式会社代表の伊藤麻理です。私は建築家です。今日はですね、栃木県的那須塩原市で図書館の設計をしております、その話をメインとして図書館とランドスケープをどうよくしていくのかというところを中心にお話ししたいと思います。

簡単に自己紹介させていただきます。私は、栃木県的那須塩原市出身なんですね。その後に東洋大学を出て、オランダの設計事務所で働いて、日本に帰ってきて独立して自分の会社をつくっています。5年前に石川県小松市のサイエンスヒルズこまつという建物を建てたのですが、これがまさに建築とランドスケープを融合させた建築なのですね。とても見た目にわかりやすく、コンクリートと緑というものを融合させて、あたかも公園のなかに建築があるかのような、そんな建築をつくりました。おかげさまで BCS 賞とか内外からたくさんの賞をいただいて、融合がとても美しいということで評価をされました。ただ、この設計をやっているときにすごく思ったのが、建築はいい、ただそのあとに訪れる人たちにとって、まちの人たちにとって、本当に使える施設や活動的な場所になっているのか、というところがちょっと疑問になったのです。建築って、モノは建てられるけれどその後は運営者次第なので、どこまでそこを一緒に議論をしながらいいものをつくっていくのかというところが重要だになって、このときにもものすごく思いました。実際は運営も頑張っているのですが、やっぱりどこか建築家が意図した、想定した通りにはなっていないところも多々あるんですね。まあそれは勿論いいんですが、改善して使いやすいようにしていってもらっていいんですけども、やっぱり腑に落ちないところがすごくありました。そこで、今回の那須塩原市の図書館では、その辺を改善して市民と一体となってよりよい建築をつくっていききたいなという思いがだんだん強くなりました。

那須塩原市の図書館は、公共施設なので建築はコンペだったのです。3年前に栃木県の黒磯の駅前の場所が、いわゆる商店街のシャッター街だったのです。それを地方復興の補助金を使って再生させようというプロジェクトが立ち上がりました。市民の皆さんから多く上がったのが、交流する場所がないから交流する場所が欲しい、じゃあ交流する場所があって、本当にそれで交流するかという話もあったので、市民の皆さんが出した答えというのが、図書館が欲しいということになったんですね。交流センターと図書館を二つ別の敷地でつくろうというのが、那須塩原市で決定されました。

黒磯の駅前を復興させよう。(スライド：黒磯駅前の地図)これが黒磯の駅前で、この緑が商店街で割と30年前と変わらないようなそんなトラディショナルな雰囲気があるのです。そんな駅前のここがちょうど図書館になって、ここが交流センターになると。この二つをメインとして復興していこうという計画になっていました。われわれはコンペに参加して、提案した会社が156社、そのなかから一番を取らせてもらいました。もちろん、地元だったのでごい力が入って、もちろん名前も伏せられている状態だったので、そこで審査に対しては公平はありました。われわれが提案したのは、ただそこに建築をつくるだけじゃなくて、市民が本当に使える施設とするためにはどうしたらいいのか、また図書館なので、ある世代だけが使う、ヘビ

一ユーザーだけが集まる場所ではなくて、小さなお子さんから高齢者まで、あらゆる世代がそこで交流しないと交流エリアにならないと思ったので、いろんな世代がちゃんと使える図書館をつくりたいっていうのをすごくコンペでいいました。というのも、今ある黒磯図書館を訪れたときに思ったのが、昼間誰もいなくてがらがらなんですね。朝は年配の方が新聞を読んでいると。昼になるとお母さま達がいらっしゃると。夕方になると勉強する学生だけなんですね。簡単にいってしまうと、年間何人の人がここを使ってくれるのだろうというような第一印象だったのです。これをどう活性化させて、誰もが、普段図書館に来ていない人たちを呼び込むか、というのがすごく一番の課題かなというふうになりました。私は黒磯で生まれ育ったのですが、正直黒磯図書館に行ったことが、1回か2回くらいしかないんですね。それなんでかっていうと、すごく単純な理由で、読みたい本がないし、私勉強がすごく嫌いだったので勉強するためにも使わないし、誰がなんのために図書館って使ってるんだろうって、正直小さい頃から思っていました。このコンペがきっかけで、世界中の図書館から日本の図書館もだいたい50近くまわらせていただきました。そのなかで一つの答えに辿り着いたのが、わかりやすくいうと、実際使っている人がヘビーユーザーだけで、結構使っていない人が多いんだなということを感じました。じゃあその使っていない人たちがここへ来て、活動的になって、なにかを学んで、自分の将来のために活かしてもらえるようになりたい、そんな施設にするためにはどうしたらいいのかということを感じて考えるようになりました。

那須塩原市がですね、基本計画としてこういったことを打ち出しました。『人が集まり新しいことが生まれる図書館』をここに作ります』と。これ上位計画なんですけども、コンペのときにもこの情報が出ていて、これを満たすような建築をつくってくださいという要綱でした。これを見て、すごく素晴らしいなと思いました。ちゃんと地域の特徴、大谷石だったり、実はカフェが結構黒磯駅前有名で、割と地元の人が地域の環境とか素材とかを使って建築しているカフェが多く、ショウゾウカフェ (NASU SHOZO CAFE) とか、あとは市民の皆さんが結構活動的で、夜市も駅前でやっていたりとか、朝市やっていたりとか、夏はキャンドルナイトとか、年間の駅前の活動計画をみると毎月なにかをやっているんですね。だから活動する市民はすごくたくさんいるということを感じました。なのでこういうことをもし本当に実現したら、実際使う市民も多いし、なにかきっかけが与えられれば、駅前がすごく活性化するのはないかっていうことを思いました。

そのなかでじゃあ建築でなにを提案しようと思ったときに、「サイエンスヒルズこまつ」で気づいたのですが、建築つくっただけじゃいけないんだ。そのあとどう使われていくのか、どうあるべきなのかなと考える必要じゃないかと思いました。そのなかで私が提案したのは、公園って人が集まるじゃないですか、なんかふらっと来て。公園のいいところは、無料だし、そこでごろごろできて、日向ぼっこしたり、木の下で本を読んでいる人もいるし、かと思えば、グループで漫才ごっこしていたりとか、ボール遊びしていたり、そこでさまざまな活動がOKなのです。だから、みんな好んでそこへ行くし、リラックスすることができる。そういった行為を図書館のなかでつくってあげられれば、誰でも来るんじゃないかと思ったのですよ。小さい子から、高齢者、あとは学生さん、あらゆる世代が集まるのは公園かなと思ったので、公園と同じ環境をつくってあげようというのが最初のスタートでした。

じゃあこういう環境をどうやって建築でつくるのか、というところで私たちが一番最初に考えたのは、森があって緑があって、葉っぱの隙間から光が降り注いでいる、木漏れ日が入る。葉っぱの隙間から光が降り注いで木漏れ日がある、まずそういった環境を建築でつくってあげようと思いました。そこではフレッシュな空気が流れてなおかつ、もちろん明るいところもあるし暗いところもあるし、葉っぱがあるところはちょっと低い落ち着いた空間にもなるし、「ぼん」と空が抜けると、そこは天井が高く太陽が燦燦と降り注ぐ。そんなふうに見上げたときの高低差とか光の入り方とか、そんなところを建築でつくってあげれば、公園の森の下で本当に本を読んでいるような、そんな環境がつかれるのではないかと思いました。そういった環境をつくれれば、自然にみんなリラックスして活動が生まれるんじゃないかなって。建築がやってあげるのはそういう、まず環境をつくってあげようというところからスタートしました。

そして考えたのがこれです（スライド：木漏れ日の差す木々の下で人々がさまざまな行為をしているイラスト。葉の部分と幹の部分の境目にラインが引かれている）。まさに森があって、木漏れ日があって、その下でさまざまな行為がある。見上げたときというのは、葉っぱのこういうガタガタしたラインがあって、これ、われわれリーフラインと呼んでいるんですけど、このリーフラインを建築でつくってあげて、そこから光が入って、本当に森の見上げたようなシルエットをつくってあげれば、森のなかで本を読んでいる環境がつかれるんじゃないかと思ってこういう建築になりました（スライド：リーフラインを模した屋根のある建築模型の画像）。これをリーフラインと呼んでいて、ここから光が入ってきて、天井の高い所、低い所、あるいはちょっと籠れるような場所があったりとか、そんな建築をつくろうと考えました。

黒磯駅前なのですが、（スライド：黒磯駅前の航空写真）商店街があって、こちらに住宅街があって、ここにスーパーがあって、奥が黒磯高校へ行く道なのでですね。1日にこの駅使う人数ってたぶん数百人程度です。下手したら人がほとんど歩いていないような駅です、簡単にいってしまうと。人口は11万人いるのですが、やっぱり車社会なので、歩いている人というのは、黒磯高校に通う隣町から来る人が朝ここを通過して、あと住宅街からスーパーへ行く人がここを通過しているくらいなんです。そうすると、この図書館というのはちょうどそういう人たちの通り道になるのですよ。なので、通り道を邪魔しないでそのまま建築をつくろうと思いました。スーパーへ行く通り抜けの道、黒磯高校へ通う通り抜けの道。駅があって、住宅街から通り抜けられる。この大きなアベニューと呼んでいるんですが、この通りをつくってあげて、その周りに小さなストリートができています。そんな平面を考えました。その間をバイパスっていったらあれですが、散策路ですね。森のなかって直線の道ってないじゃないですか。ぐねぐね曲がった道をぐるぐると歩いているといろんな場所に行き着く。なので同じように、道をランダムにつくってあげて、迷い込むような、そんな空間をつくってあげようと思いました。そのなかにですね、緑の森のポケットというふうにわれわれは呼んでいるのですが、森を歩いていくと、ところどころ葉っぱが途切れてそこに光が入り、そこを見上げると空がある。そんな状況をとところどころ散りばめてあげる。そうすると、本当に森のなかにいるような、光のグラデーションとか、光のリズムがつかれるので、そんな環境をつくってあげる。この森のポケットがいわゆる、なにをしてもいい場所になっていくんですね。

スライドは図書館の1階の平面図です。こんな形で通り抜ける道があり、森のポケットと呼ばれるものが貫入していて、残りが基本的なスペースになっています。その森のポケットというのは機能をもっていないです。機能をもっていないくて天井見上げると吹き抜けになっていて、とても明るい場所になっています。1階が道になっていてその周りにたまたま本棚がある、この本棚もハの字にランダムになっているのですが、なるべくグリッド状にならないような工夫をして、なるべく森のなかに迷い込んだような状況をつくってあげるようにしています。なおかつ壁で仕切らないということを徹底しています。空間どうしをなるべく壁で仕切らない。なんでかというともう簡単な理由で、森に壁ないじゃないですか。やんわりお隣どうしがみえたりするので、この図書館も同じように、最低限のところは壁がありますが、基本は壁がないようにしてあげて、巨大なワンルーム、本当に森のなかにいるような状況をいかにつくるかということを徹底しました。

スライドは多目的ホールです。これは道からみたパースですが、道に対して本棚をハの字に開いています。これはなんでかという、外から図書館のなかの活動がみえるようにしてあげる。要は、壁をつくってクローズにしてしまうと図書館の活動がみえなくなって入りづらくなってしまいますので、単純に外と連動してあげることで入りやすくする。なおかつどんな活動をしているのか、興味をもって入ってきてくれる人がたくさんいたらとよいなと思うので、なるべく面出しの状態の本はみえるようになっていて、あとはイベントでこの空間の貸出ができるので、グループでなにかイベントをやりたいってときにはここを全部借り切ってもらって、この棚にグループイベントの模様をこの壁に貼りだしたりすることができる。そうすると活動がファサード、外側に溢れ出ていくんですね。そこから人が入りやすくなってくるという状況をつくってあげようと思いました。なおかつ壁はないんですが、斜めにすることで壁っぽくみえるので、やんわり仕切ってあげることもできるんですね。あまり仕切られすぎずに、だけど必要なときは仕切ってもみえるという。そういう建物を心がけました。なので壁をつくらないということを徹底している1階になっています。で、ここは森のポケットなので、天井からトップライトから明るい光が入るようになっています。

2階が図書館、蔵書とかがたくさんあるスペースになっているんですけども、2階も普通の図書館ですと十進分類法、TSUTAYAさんですとまた独自の分類があるんですけども、一般的に十進分類法でやるとこう横一列に並んでしまうと思うんですね、図書館って。でもこう並ぶと、森のなかにグリッドの空間はないので、散策できないなあっていうのをずっと思っていたんですよ。なので、私たちが提案したのは、十進分類法を円グラフのようにしてあげて、これがいいのは自分が中心に来るとどこにでも行ける、同じ距離で。ということができるとですね。なおかつこの周りに通り抜けられる道をつくってあげる。そうすると、今哲学のところのいたんだけどその隣に行くと科学があると。いろいろな分類に偶然出会うことができる。偶然出会うことができると、新しい本に出会うチャンスがすごく増える。グリッド状に並べてしまうと、歴史の本に行こうという新しい本に出会うチャンスがなくなってしまうので、帰りがけに歩いていたらたまたまおもしろい本みつけた、みたいなそんな偶然性をつくってあげることがより自然に近い環境になるのかなというところで、回遊性のある道をつくって、分類は放射状にすることで、真ん中に来るとぐるっとみるとわかりやすい状態にもなっていて、道に迷

い込んで本当にわからなくなってしまうとそれはそれで困るので、わかんなかったら真ん中に来ると、十進分類法全部みえるので、見渡すとまたわかる。そういうふうになりやすさと、散策性というのを兼ね備えている本の並び方を提案しました。なおかつ、真ん中に賑わいがあって、周りが静かな状況になる。図書館って賑わいだけつくってもらってもきっと困ると思うんですね。やっぱり静かに本を読みたいとか静かに勉強をしたい、そういうニーズもたくさんあるので、両輪が必要だと思っています。なので、それも壁の部屋であまり仕切るんじゃなくて、なるべくグラデーションにしてあげたら、真ん中は賑わっているんだけど、その賑わいから離れると静かなスペースが自然とできていて、そこへ、静かになりたいときは自分で探してそこへ行くと。なるべく自分で散策して好きな場所を自分で探すという状況をつくるようにしました。

スライドは2階の様子です。本棚が放射状に並んでいて、散策路をたくさんつくっています。真ん中が賑やかな場所になっています。もちろん静かな場所も用意してあげるといふふうにしています。これが上からみたパースです。真ん中がおしゃべりしてもいいよという場所で、奥に行くと、みてわかるように本がよい感じに邪魔をして、静かな環境にすごくできるんですね。なおかつ、静かなほうに向かって天井が低くなっているの、自ずと居心地がいい。真ん中のにぎわうところは自ずと天井が高くてとても開放的だ。そういう人の行為というものも、自然に反映するように建築でしつらえています。そこに、先ほどいった森のポケットのところに光がところどころ落ちることで、天井を見上げたときに、本当に葉っぱの下にいるような環境を建築がつくっています。なので、自然の行為がそのままここに現れるような、建築をつくりこんでいます。

そして1階のエントランスホールですが、黒磯というのは大谷石の蔵がたくさんあるので、建築もそれを一部取り入れようということで、階段に大谷石を使って、積層された大谷石のようになっています。地元の素材をなるべくうまく活用しようということを試みています。見上げるとトップライトがあって、本当に明るくて、まるで朝日が降り注いできているかのような、そんな状況になっています。こういった光のグラデーションとか、環境をつくることで、森のなかにいるような環境をつくることを建築で提供しています。

なおかつ夜の光ということも重要で、最近夜遅くまで図書館が開いているようになっています。ここは、地方なので周りに照明がなくて真っ暗なので、本当に。なので夜の照明で人を惹きつけるということも重要だと思ったので、明るすぎない照明というものを提案しました。基本的には蛍光灯でがらがん読みやすく明るくするのですが、そうではなくて、まちの雰囲気壊さないように、がらがん明るい照明は使わない。そうではなくて、本当にぼんぼりの照明のような、ぼわんとしたやわらかな光が外にもれるような、建築で照明を考えていますので、なるべく足元はガーデン灯で演出してあげて、照明は全部天井を照らしています。天井をリフレクションして外に光が漏れるような、そんな工夫をしています。

ここからはちょっと具体的な話なんですけど、人の行為を、森の下で人がなにかをする行為と、いうのをどうやって建築に取り入れようかなという具体的な話なんですけど、黒磯というまちは、高校生がすごく元気なんです。ワークショップにもたくさん高校生が来てくれて、自分たちの居場所がないということ、すごく私に要求してきたんですね。要は子ども世代に対し

てお母さんたちには、ものすごく児童図書が充実しているんですよ。図書館というのは、いろんなところ行ってもだいたいそうなんです。あとは、高齢者に対してとか、障害者に対してももちろんやさしいつくりになっていて、手厚いですね。

じゃあ中高生、大学生、そのあたりの居場所というのが図書館にあるのかというと、最近ヤングアダルトコーナーとかもあつたりはするのですが、じゃあそこでなにやっているのかをみると、なんかゲームしていたり、ただしゃべったりするだけで。図書館って本来学びの場所で、学ぶことでなにかを得て、自分のきっかけになって欲しい、そんな場所になって欲しいなと思うのに、なんかただ行く場所がないからいますっていうだけで、それはどうなのかなってことをずっと思っていたんですね。高校生と話していても、聞いたら、プレゼンテーションごっこをやりたいっていうんですね。それはなにかって言うと、TEDっていうプレゼンテーションの番組があるんですが、そのように自分が発表者になって、みんなの前で発表したいっていうんですよ。結構すごいなと思ったのが、自分がなにかを考えていることを第三者に発表して評価をして欲しい。それでブラッシュアップして更に考えていることを発展させていきたいんだっていうことをいうんですよ。高校生なのにすごいなって思ったんですよ。そういうプレゼンテーションごっこを友達とやれるような場所が欲しいっていうんですよ。それしつらえてくれって。なるほどそれはすごいなって思っ。そういう人がたくさんいたので、じゃあそれを建築でつくりましょうということになったんですね。もともとのコンペのときはそういう提案はしていなかったんですが、ワークショップからすごくそういう提案が出てきたので。やっぱりまちおこしとかを考えると、若い世代が活躍しないと、なかなか活性化っていうふうにはならないので、若い世代をどうやって育成していくかというのが図書館の重要な役割だと思ったので。われわれが提案したのは、これからアクティブラーニングが今後文科省のほうでも授業で取り入れていくというのがあったので、アクティブラーニングを積極的にする場所をしつらえましょう、という提案をしました。

ここでアクティブラーニングがなにかというと、グループで討論してそれを自分たちで体験して、お互いに教え合う、お互いが先生になる。先生になって、それを成果として第三者に発表して、評価を得て、ブラッシュアップをする。その過程がアクティブラーニングの相乗効果だと思うので、それをできるスペースをつくらうと思いました。われわれが提案したのは、いろんな行為、グループ学習したり、会話したり、プレゼンテーションしたり発表するような場所をどうやってつくるかということで、1階から2階に上がるころにつくったんですけども、前にもいったように空間として部屋をつくりたくなかったので、階段状にしてつくりました。1階から2階に上がる階段がたまたま大きくなっちゃって、そこで勝手に議論したり発表したりしているような場所をつくりました。これはなんでかっていうと、とある図書館に行ったら、ヤングアダルトコーナーなんですけど、部屋になっちゃってるんですね。そうすると大人が行けないんですよ。なんか寄りづらい、学生がわいわいがやがややっていて入りづらい、という状況を目にして、こうなると多世代交流はできないなと思ったんですね。なので階段の横でそれをやってくれれば、大人も入りやすいし、子どもも参加しやすいし、逆にいうと、そういうふうにしてしまうと学生が悪さをしてしまう、それを見守る管理人も必要だ、みたいな話になっちゃうので、階段のところであれば皆みてくれるからそういうことないんじや

ないですかということで、われわれは、階段がたまたま大きくなっちゃって、そこに学生が勝手に活動しているという状況をつくるということを提案しました。

このスライドがそうですね。2階に上がっていくこれが階段ですね。巨大な階段。どこを上がってもいいんですが、この巨大な階段のあちこちで学生が議論をしたり、プレゼンテーションごっこをプロジェクターでしていたりとかしている、巨大な階段スペースをつくってにぎわいを出すようにしました。大人も2階に上がる時にここを通るので、たまたまみんな、なにをやっているのか、監視じゃないですが、みることができるという。なおかつ、もちろん静かに勉強するスペースも必要だということもあったので、ガラスに区切られた奥は吸音をしてあるすごく静かなスペースをつくっています。それと、收藏っていうのも、部屋にしてしまうと奥にどんな貴重な本があるのかわからないので、このアクティブラーニングスペースの向こうが收藏スペースになっていて、これもみえるようになっていきます。收藏庫も部屋で隠すのではなくて、表にしてあげて、学生さんや若い人たちがみえるようにしてあげて、貴重な本、歴史的な本をみたいという興味を出すような、そんなしつらえにしてあります。ちょっと眺めをみると、このスライドのようになっていきます。階段状にあちこちになっていて、勝手に議論やら活動ができるような、学生さん向け、若い人たち向けの活動スペースというのを用意しました。

黒磯高校に通っている人たちって、学校終わったら行く場所がないんですね。地方はやっぱ行く場所がないので、どこにたまってるかかって聞くと、フードコートだったりとか、コンビニの前ですっていうんですね。そこでなにをやるかといったらくっちゃべっている。こういうものをつくると、ぜひここで活動をしてくれということになる、しかし活動しろっていったら、スペース与えるだけじゃ活動にならないので、運営側にいったのは、プロジェクターは最低限欲しいし、もちろんiPadやPCとか、最低限のタッチパネルとか、そういったきっかけを与えないとさすがにやらないので、それは最低限用意してくださいというふうに要求しました。裏話をいうようであれなのですが、なかなか役所というのはそういうわけにはいかないもので、なかなかそういうの理解してもらえなかったもので、設計としては、「わかりました。じゃあ建築工事費のなかに入れます」ということで、入れました。やはりそこまでしないと活かされないんですよ、空間って。建築家がつくって終わりになってしまうと、そういう点が意図したものと違うので、すごくイレギュラーだったのですが、工事費のなかに入れました。やっぱりワークショップで、学生さんたちが「やりたいんだ、やりたいんだ」っていつているんですよ。大人は「わかりましたよ」ってワークショップ終わるんですよ。そのあと実現しないっていうのがワークショップの現実なんですよ。それを目の当たりにして、そうはさせたくないなという思いがあったので、だったら、項目を、あまりよくないんですが項目をちょこちょこやって、建築費のなかに。

ただ、やっぱり誰かが、大人がそういう協力者になってあげないと、若い世代が育たないですよ。だって学生にどの図書館行っても、ここではしゃべらないでください、ここでは飲食ダメです、ここでは騒がないでください。禁止事項だらけで、こんなので活動っていえるのかわかってすごく思ったんですよ。活動を促すようなことを本当にやりたいなら、禁止事項をなくせていったんですよ。なくしてルールをつくれればいい。学生はバカじゃないからちゃんとル

ール守りますよ。大人がちゃんとしたルールつくらないから、そうするんですね。頭ごなしに規制するのではなくて、皆で話し合っ運営していく体制が必要ですよって話しました。なので、ここは学生に運営させなさい、ということは今も設計側では提案しています。学生が自発的に運営していくことで、ちゃんとやれるんですよ、若い子たちは。それをやらせないんですよ、大人が。だから、私たちが今提案しているのは、黒磯高校といろいろな高校があるのですが、その高校生たちが自主的にここを管理運営する、常に綺麗にするというのをやらせようというのをやっています。こういうことはワークショップで提案があったことで変わってくることなんですよ。始めの設計からこういうことがあったわけじゃなくて、ちゃんと皆で話し合っ、市民からの声があっ変わるんですよ。だから私はまちが変わるんだなと思うので、そういうことをやらせる大人になりたいなとすごく思っ、今やっています。まだOKはしてくれないんですよ。実際はOKしてくれないんですが、まだオープンまで時間があるので、粘り強く交渉していこうかなと思っっています。

児童スペースも同じで、結構話を聞いていると遊具がいっぱいある図書館がすごく多いんですよ。それはそれで小さな子たちが来るきっかけになるのでいいんですよ。まず来ないとダメなので、それはいいんですけど、そこを真剣に遊んで帰っちゃうって子も多いので、そうじゃなくて、われわれは、児童スペースを大きく二分割にして、0~5歳で行動が違っし、6~13歳で行動が違っことでそこを大分割して、0~5歳は確かに遊びでいいと思っんですね。ぐるぐる走り回っ遊んでいるうちに、おもしろい本みつけた、これお母さんに読んでもらおうっというのでいいなと思っしたので、ぐるぐる走ってください。どうぞぐるぐる走ってもらっ、真ん中では裸足でごろごろしちゃってください。それと、子どもって小さいスペースとか狭いスペースがすごく大好きなので、穴倉の奥に秘密基地をたくさんつくっっています。この小さなトンネルを抜けると小さな穴倉スペースがあっ、なんか秘密基地のような、そんな場所をつくっっています。そこでごろごろ本を読む。公園と同じですよ。草むらのなかで寝転んで本を読む。そんな状況をつくっあげます。6~13歳には、もうちょっと大人になるとあんまりごろごろというよりは、自分で本を探しに行くことができるんですね、行動としては。それをお母さんに読んでもらおうっというように。そういった行動が多いので、発見することができるようにしつらえにしてあげて、といっってもまだ子どもなので、ちょっと穴倉的なものも欲しいだろう、一部あります。ただ基本的には自分で探っ来てお母さんに読んでもらおう。この二つの児童図書の間にお母さんが本を読んであげるスペースをつくっっています。2階は大人の本がたくさんあるので、ここの階段は2階へつながるんですよ。大人へ向かう階段といっ、ここの階段の本は子どもから大人になっていく過程の本をしつらえてあげると。そういう本の置き方を提案しています。なので、行動が違っ二つの児童の間で大人が本を読んであげるスペースがあっ、子どもたちは上に行く大人への本が並んでいると。そんな成長過程がわかるようなしつらえにもしています。

あとはワークショップで「ツリーハウスが欲しい」ってさんざんいわれたんですが、建築的にやっぱりなかなか難しくて、法的なこともあるし、あとは管理運営が難しいというのがネックになって。じゃあ「なんでツリーハウスが欲しいの」って聞いたら単純な理由なんですよ。高い所で本が読みたい、木の上で本を読みたいということだったので、階段を木に見立てたん

ですよ。これは建築上らせん階段なんですけど、ツリーハウスのように高い所で本を読めるような場所がいくつかあるんですね。それは実現できるので、ツリーハウスと同じ環境じゃないかということで子どもたちを説得して、大人の事情でツリーハウスはできませんよということを行いました。でも、そういう純粋な気持ちを建築に取り入れてあげたいとは思っていて、私も確かにツリーハウスで本を読みたいと思うので、それをやっぱり本当は実現したかったのですが、簡単にいっちゃうと法規的に燃える素材は使えないとかいろいろあるんですが、そのなかで実現はなるべくしてあげたいという思いから、そういう行為ができるようになっていよというふうになりました。

1階はマガジンストリートになって雑誌がたくさん並びます。本棚の一区画の箱というのも実は貸出ができるようになっていて、市民が1箱いくらで借りて、自分が展示をしたりすることもできるようになっています。昔でいう物々交換みたいな、そんな感じを取り入れようと思っています。要は、個人で6個くらい箱を借りてなにかグループで発表したり、あるいは全部箱を借りて小学校単位でなにか発表をしたり、そんなことができるような、フレキシブルな使い方ができる1階のボックスになっています。普段は雑誌がたくさん並んでいて、2階の専門書へ上がるための導入になっています。例えば、こんな感じです。通る方が、誰々さんの特集して企画展をやりますということもできるし、こういうところにiPadを埋め込められるような電源もあるので、なにかデジタルとつないで、イベントをやるようなこともできるし、例えば受験シーズンになると、iPad全部並べて上から英単語が降りてきて、みんなで英単語の当てっこするとか。そういう使い方もできるので、このタワー型の本棚の上ってどうやって使うんだいといった話もあったのですが、そういったことを、市民が使い方を考えてくれるような、そんな余白を残しながらつくっています。

駅前広場というのも重要なので、わりとここは市民が夜市をやっていたりして活動の拠点になっていたんですね。なので、それができるようなしつらえをしてあげようということで、イベントができるような、車が乗り入れられるような状態にしてあげて、図書館のホールと一体利用できるようにしつらえになっていて、休日のイベント対応というものにも、もちろん対応しています。

最後に写真を、今どういう状況かおみせします（スライド：図書館の建築の経過）。来年の3月に建築は完成します。オープンは夏になります。なにもないところからだんだんこんなふうにはできあがってきて、鉄骨の屋根がこんなふう組み上がって、こうやってみると本当に葉っぱの葉脈みたいな感じなんですけど、まさにそんな状態で、屋根ができて、2階ができて、今天井が張られて、外からの感じですね。今こんな感じで出来上がっています。あとは、本棚をどんどん入れて完成に向けてやっている感じです。照明のテストなどもしています。まあこんな現場を支えているのは職人さんなので、職人さんとも毎週のようにディスカッションをしながら、われわれは地元の業者さんを全部使ってやっています。20億規模の建物なので、だいたいこういう規模だとゼネコンが入るんですが、できるだけ地元のマンパワーでやろう、ということを決めてやっています。なので全部地元の業者を使って。そうすると愛着がわいてくるので、長くメンテナンスもしてくれるし、利点はたくさんあるので、なるべく地元の素材、地元の業者、地元還元するということでやっています。

最後になるんですが、森の下でいろいろ行われる行為を建築に反映していくというのが、われわれにできるランドスケープ的な使い方というふうに考えて今やっています。ここからは市民の皆さんが本当にそういうふうに使っていくかというところが試されるなというふうに思います。以上です。ありがとうございました。

(永田)

ありがとうございます。

さっそく次の森山さんのお話をお願いします。

【講演】「デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープ」

(森山)

皆さん、こんにちは。岡山から参りました森山と申します。デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープというテーマでお話をさせていただきます。

ここに掲げたのは、「江戸一目図屏風」という 200 年前の屏風絵です (<https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/3320315200/3320315200100020/hitomezu-v3/>)。鋏形蕙斎という岡山県津山藩の絵師が、江戸の景観、ランドスケープを描いたものです。東京スカイツリーの展望台に、複製パネルが設置されていますので、ご覧になったことのある方も多いのではないのでしょうか。隅田川のやや東寄り上空からの眺めで、われわれが今いる日比谷はちょうど真ん中あたりになります。今回参照するデジタルアーカイブのデジタル岡山大百科やジャパンサーチでも閲覧できます。

お話しする内容ですが、そもそも情報とランドスケープという二つの言葉は、皆さんの頭の中では結びつきにくいものでしょうから、まずはランドスケープとは一般になんなのかということから話を始め、次に情報のランドスケープとはなんなのかということに話を展開します。情報のランドスケープについては、手近な図書館の閲覧室、さらにデジタルアーカイブで確認します。まずは空間のランドスケープ、すなわち一般的なランドスケープ、次に情報のランドスケープです。その際、情報のランドスケープを機能させるツールをお話しします。また、なぜランドスケープ機能が必要かということを考え、最後に、課題と解決指針を示します。

ここで、今回参照する五つのデジタルアーカイブを紹介します(図4参照)。まず、世界規模、国家規模の大量かつ多様な内容的視点のコンテンツが提供される三つのデジタルアーカイブです。第一に、国の枠を越え、ヨーロッパの文化遺産のコンテンツが提供される Europeana です。視聴可能なコンテンツ数は、トップページの情報によれば、2019年7月14日時点で57,642,199件です。第二に、米国各地の図書館、博物館、文書館等のコンテンツが提供される DPLA (Digital Public Library of America ; 米国デジタル公共図書館) です。視聴可能なコンテンツ数は、トップページの情報によれば、2019年7月14日時点で34,619,208件です。第三に、日本の分野横断統合ポータルである国立国会図書館運営のジャパンサーチ(試験版)です。視聴可能なコンテンツ数は、トップページの情報によれば、2019年7月19日時点で1,184,320件です。一方、内



図4 参照したデジタルアーカイブ

容的視点において特化したコンテンツを提供するデジタルアーカイブとしては、岡山の地域関係に特化した岡山県立図書館運営のデジタル岡山大百科と、震災関係に特化した国立国会図書館運営のひなぎく（国立国会図書館東日本大震災アーカイブ）の二つです。

まず、ランドスケープ（landscape）という言葉ですが、景観と一般に訳されます。地理学用語としては、「一定の特徴を有する空間単元を形成している地表の一區画」と定義されます（石井英也「文化景観」『地理学講座4 地域と景観』古今書院，1991，p.42.）。だから、視界に入る全ての景色，風景を指すという訳ではなく，特色あるひとまとまりの空間と捉える必要があります。この捉え方が起点となります。前提条件として，空間が基盤にあります。さらに，地理学では，ランドスケープの五つの特色を挙げています（中村和郎「地域・景域・景観」『地理学講座4 地域と景観』古今書院，1991，p.10-11.）。第一に，異なるが，関連し合うものが，同時に存在する。第二に，特有の形態をもった空間を指す。第三に，空間の広がりには階層性がある。第四に，類型，タイプ，モデルとして捉えられる。第五に，時間とともに変化する。

以上の特色について，冒頭で挙げた「江戸一目図屏風」で具体的に確認します。

第一の関連し合うものということでは，川と橋との関係。隅田川があるから両国橋があるというような関連性です。第二の特有の形態をもった空間ということでは，高台の山の手，低地の下町ということでは，台風が来たら，一方は安全だけど，もう一方はすぐに流されてしまうような対照的な形態の両空間です。第三の階層性ということでは，山の手の中に武家屋敷の一區画がある，江戸城もある，武家屋敷が江戸城を取り巻いている，下町の中に庶民長屋があるというようなものです。第四の類型ということでは，この構図は，江戸に限らず地方都市でもやはり同じだったろうと考えられます。第五の時代とともに変化するとは，江戸，明治，大正，昭和，平成，令和と刻々と変わるようなことです。以上の地理的なランドスケープの特色は，情報のランドスケープにおいても通じるものがあると思われま

そこで，情報のランドスケープに進みます。地理学でのランドスケープの定義は，先ほど示したように「一定の特徴を有する空間単元を形成している地表の一區画」ということでした。前提条件として，空間が基盤にあります。一方，情報のランドスケープについては，前提条件として，メタデータ，つまり目録情報，索引情報を基盤に据え，暫定的な定義として，「情報を，多様な視点から，絞り込み，取捨選択し，見渡した際の特色あるまとまり」と，ここではひとまず示しておきます。

このことについて，図書館の閲覧室での情報のランドスケープに至るプロセスを具体的にイメージするとわかりやすいかと思えます。利用者は，閲覧室の本の配置が主題別に分類で並んでいることを念頭に置いて，目当ての書架に行きます（図5参照）。

それよりもやはり，職員に聞いてみるのが手っ取り早い。館内地図を示しながら職員が教えてくれます。料理の本はどこにありますかと尋ねると，窓際の雑誌があるブラウジングコーナーの隣にありますよということで，行ってみたら料理の本が，まとまりのあるものとして並んでいて，料理本のランドスケープを確認できます。さらにみると，料理の上の階層には，家政学の590番台があり，その上の500番台は技術・工学ということで。こうした点から情報のランドスケープの階層性を確認できます（図6参照）。

閲覧室での情報のランドスケープでは，分類を基盤に資料が配置されますが，異色なもの

に、企画展示があります。似た性格のものをグルーピングした独立空間のランドスケープとして、自己完結しています（図7参照）



図5 閲覧室での情報のランドスケープに至るプロセス



図6 閲覧室での情報のランドスケープ①



図7 閲覧室での情報のランドスケープ②

出典：Google ストリートビュー・岡山県立図書館

(<http://www.libnet.pref.okayama.jp/riyou/map/googlemap.htm>) (accessed 2020-01-20)

図書館以外で、日頃身近に接する情報のランドスケープといえば、Amazon等の通販サイトが代表的です。キーワード検索ももちろんできますが、カテゴリーも意識され、そこから段階的に展開します (https://www.amazon.co.jp/gp/site-directory?ref=nav_em_T1_0_2_2_20_fullstore)。

「絵本、児童書」のカテゴリーのように、意図的な重複によって、個人の認識の違いを補う工夫もみられます。ここからサブカテゴリーに展開すると(https://www.amazon.co.jp/絵本-児童書-本/b?ie=UTF8&node=466306&ref=sd_allcat_children)、左側にファセット検索、つまり複数の視点の組み合わせを選び、絞り込むことによって、該当する情報の一覧が展開されます。

こうした仕組みも、情報のランドスケープとみなして話を進めます。

以上の事例確認を踏まえて、ここで改めて、情報のランドスケープを定義します。先ほど、「情報を、多様な視点から、絞り込み、取捨選択し、見渡した際の特色あるまとまり」と、暫定定義していましたが、「多様な視点から」を、「内容的、形態的視点から」に置き換えます。つまり、「情報を、内容的、形態的視点から、絞り込み、取捨選択し、見渡した際の特色あるまとまり」と定義します。具体的には、メタデータが、次に挙げるようなツールによってフィルタリングされ、特色あるまとまりとなって提示されます。

内容的視点としては、主題、テーマ、ジャンル等が挙げられます。対応するランドスケープ

を機能させるツールとして、NDC等の分類、シソーラス、各種典拠等があります。

形態的視点としては、時間軸、空間軸のほか、コンテンツの形態、たとえば、動画、画像、音声、文字情報等が挙げられます。時間軸、空間軸に対応するランドスケープを機能させるツールとして、年表、地図等があります。

各視点が具体化されたものは、体系化される必要があります。すなわち、実質的に同じ内容、形態のものが集約されて提示される必要があります。階層性や関連性を伴わない単なるフリーワードでは、ランドスケープ機能が働きません。分類を例にとると、階層性は、先ほども申したように、料理の上に家政学があり、その上に技術・工学があるというイメージです。関連性は、598に家庭の医学がありますが、493.9に小児科があり、それらが関連、参照し合うというイメージです。

それでは、ここからは、デジタルアーカイブを対象とした情報のランドスケープを考えます。複雑性の高いデジタルアーカイブ、具体的には、MLA連携。MがMuseum、LがLibrary、AがArchivesという枠組みで構築されたものを主に考えます。

まず、内容的視点によるランドスケープのうち、既存の分類法の活用、具体的には分類検索の有効性を探ってみます。

MLA連携では、個々の施設が異なる分類法を採用する場合、標準とする分類法に分類変換、移行をするために、分類法間のマッピングを行います。実際に行うと、分類法の性格の違いにより、移行先の分類法で表現しきれないことがあります。たとえば、デジタル岡山大百科で、NDC分類 (http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/sup/jp/kyodo_ndc.html)、200(歴史)関係コンテンツのランドスケープを行うと、博物館の大量の出土品コンテンツが同一分類に集中した状況を目にします(図8参照)。

この背景には、博物館で出土品をきめ細かく博物館分類しても、分類法間のマッピングによって、移行先の図書館分類で粗い分類表現に変換、移行するということが挙げられます。この場合、分類検索自体の意義が薄れます。つまり、分類法間のマッピングの限界、既存の分類法の活用の限界です。MLA連携の複雑性が高まるほど、分類法間のマッピングによって特定の既存分類に集約し、ランドスケープ機能を提供する有効性は低下すると考えられます。



図8 NDC分類200(歴史)関係コンテンツのランドスケープ

出典：デジタル岡山大百科 (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/>) (accessed 2020-01-20)

Europeana, DPLA, ジャパンサーチが、特定の分類をツールとしたランドスケープ機能を提供していないのは、このような背景があるからと考えられます。たとえば、DPLA が提供する内容的視点によるランドスケープ機能は、ファセット検索の要素の **Subject**（主題）として、付与の多い順に 50 種限定でキーワードを並べ、選択できるようになっている程度です (<https://dp.la/search?q=>)。

換言すると、デジタルアーカイブ全般で、主題、ジャンル等の内容的視点によるランドスケープ機能が十分提供できていない状況です。

次に、形態的視点によるランドスケープのうち、地図ツールの活用を挙げます。デジタル岡山大百科の地図で、岡山県瀬戸内市の牛窓町の区画、日本のエーゲ海と呼んで観光振興しているところを、範囲指定します (図 9 参照)。



図 9 形態的視点によるランドスケープ・地図の活用

出典：デジタル岡山大百科 (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/>) (accessed 2020-01-20)

岡山県瀬戸内市牛窓町関係コンテンツのランドスケープの画面となり、3 点のコンテンツのうち「唐子踊」に関するものを選ぶと、江戸時代に朝鮮通信使が瀬戸内海を渡って牛窓町を寄港地としたことに由来する「唐子踊」という郷土芸能の映像に展開します (図 10 参照)。



図 10 岡山県瀬戸内市牛窓町関係コンテンツのランドスケープ

出典：デジタル岡山大百科 (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/>) (accessed 2020-01-20)

形態的視点によるランドスケープでは、年表ツールも挙げられます。ひなぎくの地震発生順に並んだ年表 (<https://kn.ndl.go.jp/static/ja/earthquake.html>) で、「明治三陸津浪」を選択します。すると、関係コンテンツをランドスケープできるだけでなく、先に挙げた Amazon の画面展開同様、複数の視点の組み合わせであるファセット検索も可能です (図 11 参照)。



図 11 「明治三陸地震 (津波)」 関係コンテンツのランドスケープ
出典：ひなぎく (<https://kn.ndl.go.jp/static/ja/earthquake.html>) (accessed 2020-01-20)

さらに、グルーピング機能です。閲覧室での企画展示に相当します。似た性格のコンテンツをグルーピングし掲載します。既存のツールや枠組みに収まりきらない場合に活用します。呼称は、コレクション、トピックス、ギャラリー等とさまざまです。埋もれたコンテンツを発掘し、可視化するのは腕の振るいどころです。デジタル岡山大百科のトップ画面で、「校歌」を選択すると (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/collist-jp/kyo/M2016012520372237322>), 196 曲の校歌の一覧をランドスケープできます (2020 年 1 月 20 日時点)。

グルーピング機能については、Europeana でも Galleries という呼称で活用されています。たとえば、「歌川広重」関係 (<https://www.europeana.eu/portal/en/explore/galleries/utagawa-hiroshige>) コンテンツ 45 作品のランドスケープができます (2020 年 1 月 20 日時点)。

ちなみに、「安藤広重」が同一人物ですが、「歌川広重」でキーワード検索しても「安藤広重」は含まれないという問題があります。この問題については、後ほど改めて触れます。

ここからは、なぜ、ランドスケープ機能が必要かということを考えていきます。第一に、専門知識の格差に由来するキーワード検索の限界を補完するためです。メニュー選択、ファセット検索等の活用によって実現します。第二に、言葉や概念の参照、隣接領域の提示を実現するためです。分類 (カテゴリー)、シソーラス、年表、地図等のツールで提示されます。第三に、グルーピング機能によって、埋もれたお宝を伝える、可視化するためです。第四に、提供者側にとっては、情報の偏在、不足状況の把握が容易になるためです。区分ごとのコンテンツ数の一覧によって、不足箇所の補強の必要性を認識できます。解決策の一つとして、コンテンツを募集し、参加型の仕組みをつくることが考えられます。第五に、同様に提供者側にとっては、一覧メニューに当てはめるという取り組み等を通じて、言葉や概念の体系化を進められるためです。結果的に、効率性の高いシステムになります。つまり、同じ内容の物が集約提供される

ようになります。また、異なる時代や場所で作られた同じ内容の物が集約提供されるようになります。これは、情報のストックをミッションとするデジタルアーカイブでは特に重要だと思います。その時点で存在する Web 情報を中心に提供する検索エンジンに対して、これから 10 年、100 年、1,000 年と長期の保存提供を見据えたデジタルアーカイブであれば、同種のものを集約提供でき、関連知識がなくても集約提供してもらえるような仕組みが必要だと思います。

キーワード検索の限界と、言葉や概念の体系化の必要性については、ここに挙げるコンテンツを通して理解していただけたと思います。これは、デジタル岡山大百科の郷土情報募集事業に応募された名もなきクリエイターによる、「想いでの学び舎」という想定外のタイトルのコンテンツです (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhpkvodo/kenmin/omoidenomanabiya/gakko-top.htm>)。

タイトル、著者等の代表的項目では検索ヒットせず埋もれる事例です。小学校の先生だった方が、150 校を超える廃校になった校舎を、ラジコンヘリで上空から映したものです。ラジコンヘリって言葉は、今は使われないですね。ドローン (drone : 無人機) という言葉が今活発に使われていますが、コンテンツが提供された 2006 年ころにはドローンという言葉はなく、ラジコンヘリコプター、略してラジコンヘリと呼ばれていました。その言葉をメタデータに付与していたのですが、そうしたコンテンツを現代の利用者が、キーワード検索で取り出すのは難しいと思います。異なる時代や場所で作られたものが集約提供できるように、ラジコンヘリと、ドローンを泣き分かれられないようにするのが理想的です。

言葉や概念の体系化の必要性に関する固有名詞、人名の事例として、ジャパンサーチで「安藤広重」でキーワード検索すると 276 件、「歌川広重」でキーワード検索すると 3,023 件で、両者の関係性は現状の仕組みではわかりません (図 12 参照)。いわゆる泣き分かれ状態です。先ほど、触れた Europeana でも、キーワード検索では同様の状況です。

「安藤広重」で検索: 276件

「歌川広重」で検索: 3,023件

＜関係性がわからない、泣き分かれ例＞

図 12 ジャパンサーチ (<https://jpssearch.go.jp/>) (簡易検索) での比較 (accessed 2019-09-22)

ちなみに、Google では、「安藤広重」で検索すると、「歌川広重」の参照表示があります。ただし、「歌川広重」で検索すると、参照表示は出ません。限定的なランドスケープと呼べるかもしれません（図 13 参照）。



図 13 Google (<https://www.google.com/>) での検索比較 (accessed 2019-09-29)

それでは、デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープを、より精度の高いものとするための課題を挙げ、解決指針を示します。

課題を 2 点挙げます。第一に、既存の分類、カテゴリー体系、あるいはフリーキーワードの活用における限界です。分類体系、カテゴリー体系、あるいはフリーキーワードは、時間の経過とともに急速に陳腐化します。それにもかかわらず、NDC 等の分類体系の改訂間隔は少なくとも 10 年にかかるとともに、メタデータ、目録情報への付与済み分類、フリーキーワードの将来的変更は未想定です。付与した時から変わりません。つまり、変化に対する柔軟性の欠如の問題があります。第二に、同義語、固有名詞や人名の別表現、別表記について、個人によって認識の格差があることに由来する機会損失の発生の問題があります。内容的視点によるランドスケープ機能が不十分な状況に由来する二つの課題について、主要なデジタルアーカイブでいづれも未解決であり、いわば限定的なランドスケープしかできていない状況といえます。

ここからは発表者の個人的見解となりますが、以上の課題への解決指針を示します。以上の二つの課題に共通するのは、現状のデジタルアーカイブで、言葉や概念の体系化が進んでいないことです。言葉や概念の体系化を持続的に進めるために、必要なことはなにかということ突き詰めて考えると、各デジタルアーカイブとシソーラスとの連動を進めることに帰着しました。

このことについて、次のように四段階で考えます。第一に、各デジタルアーカイブが API 機能をもつシソーラスを共有します。API とは、あるプログラムが別のプログラムを呼び出す際の仲介機能です。ちなみに、シソーラスとは、索引、検索用の構造化された統制語彙集です。なお、シソーラスは固有名詞や人名の別表現等の典拠機能を含むとともに、多言語対応です（図 14 参照）。

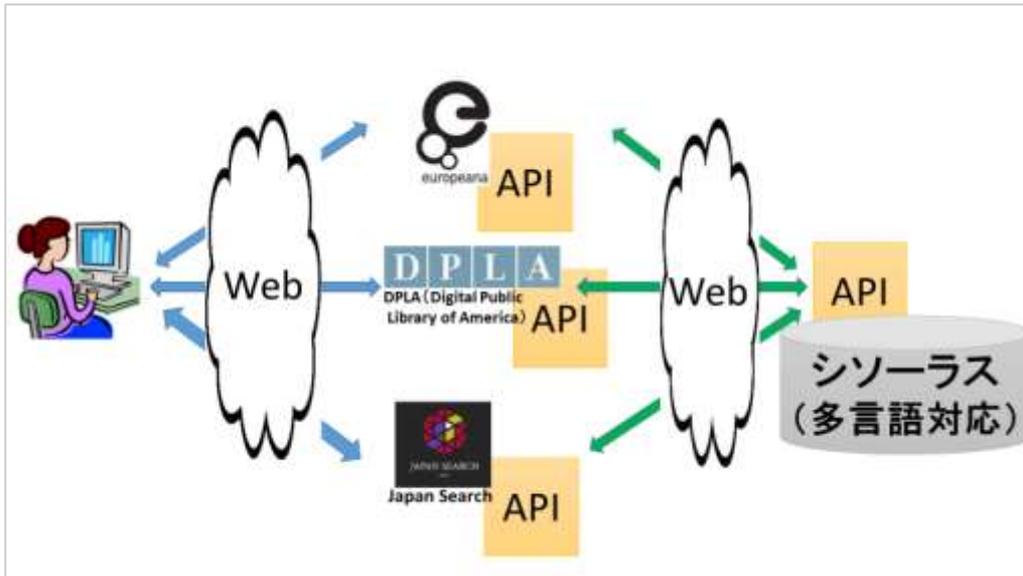


図 14 API 機能をもつシソーラスと連動するデジタルアーカイブ

第二に、メタデータ記述のキーワードと、シソーラスの関連用語が連動します。このことによって、たとえば、デジタルアーカイブ上で、「ドローン」付与コンテンツ、「ラジコンヘリコプター」付与コンテンツの両方が参照できるようになります。「ドローン」というキーワードで検索すると、シソーラスを参照し（図 15 参照；例示したのは JST シソーラス map 「ドローン（drone；無人機）」関連の表示一覧）、メタデータにキーワード「ラジコンヘリコプター」が付与されたコンテンツ（図 16 参照；例示したのは「想いでの学び舎」メタデータ）も含めた情報のランドスケープが実現します。つまり、デジタルアーカイブ上で、「ドローン」付与コンテンツ、「ラジコンヘリ」付与コンテンツの両方が参照できるようになります。

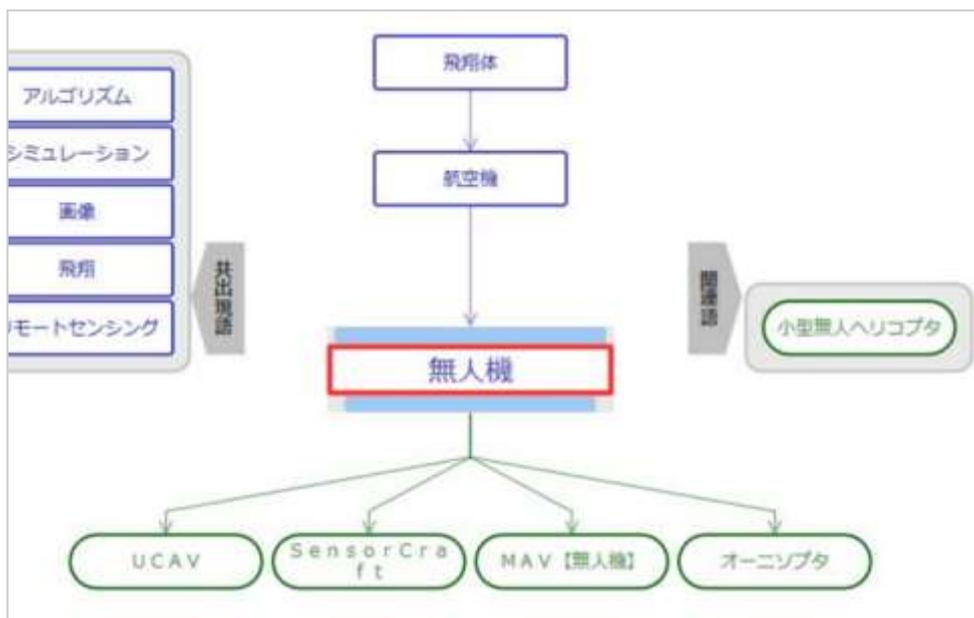


図 15 JST シソーラス map (用語マップ) 「ドローン (drone；無人機)」関連の表示一覧

出典：JST シソーラス map

(<https://thesaurus-map.jst.go.jp/jisho/fullIF/index.html/>) (accessed 2020-01-20)

タイトル	想いでの学び舎 ホームページ (オモイデノマナビヤホームページ)	
郷土情報の種類	ホームページ	
作成者または作成団体	堀家純一 (ホリエジュンイチ) 岡山県立図書館 (オカヤマケンリツトショカン)	
公開者または公開団体	岡山県立図書館 (オカヤマケンリツトショカン)	
検索キーワード	ラジコンヘリコプター、空撮、閉校、校舎	
参考情報源または引用情報源	『岡山県教育史 中巻』岡山県教育会 (1942年)、『岡山県教育史 下巻』岡山県教育史刊行会 (1961年)、『学制百年史』文部省 (1972年)、『岡山県産業教育百年史』岡山県産業教育振興会他 (1986年)、『岡山県教育史(昭和三十一年～昭和五十年)』岡山県教育委員会 (1991年)、『岡山県教育史(昭和五十一年～平成七年)』岡山県教育委員会 (2006年)	

図 16 「想いでの学び舎」メタデータ

出典：デジタル岡山大百科 (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detail-ip/id/kvo/M2006021512523651289>) (accessed 2020-01-20)

第三に、シソーラスの継続的なメンテナンスが必要となります。つまり、時間とともに変化する言葉や概念への対応です。Web でのボランティア参加型や、AI のディープラーニングが考えられます。

第四に、シソーラスの体系化、階層化の完成度を高め、シソーラスの個別の用語マップをつなぎ合わせていくと、究極的にはまとまった分類(カテゴリー)体系が構築され、ランドスケープを一覧メニューから見渡すことができるようになると考えられます(図 17 参照; 例示したのは JST シソーラス map (用語マップ)「ドローン」の上位階層「工学」の表示一覧)。

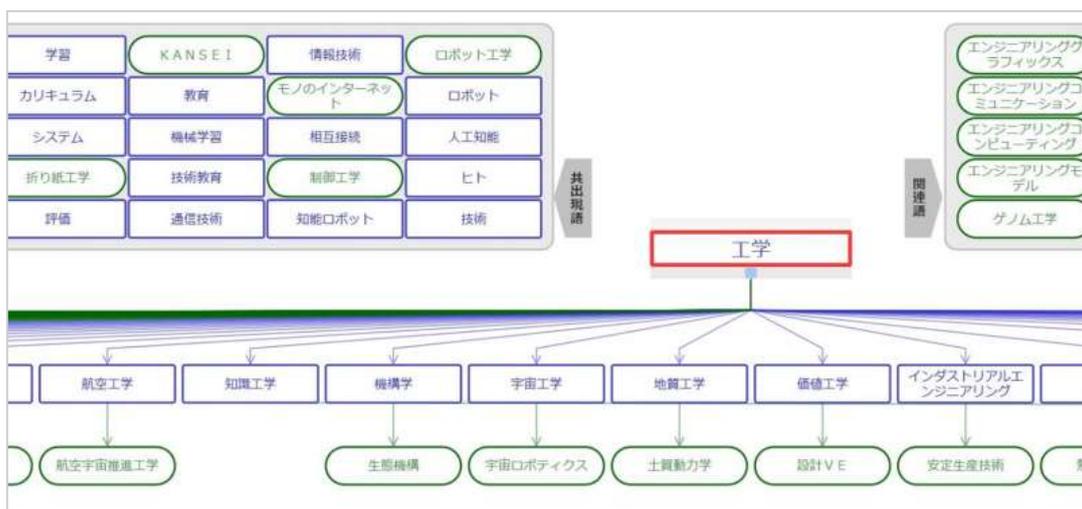


図 17 JST シソーラス map (用語マップ)「ドローン」の上位階層「工学」の表示一覧

出典：JST シソーラス map (<https://thesaurus-map.ist.go.jp/iisho/fullIF/index.html>) (accessed 2020-01-20)

最後に、金をかけてシステム改造をしなくても、すぐにできることを二つ挙げておきます。第一に、埋もれたお宝コンテンツを可視化するという事です。具体的には、グルーピング機能の活用、Web 上での企画展示を行うという事です。第二に、情報の偏在、不足状況等について、ランドスケープ機能によるチェックを行っていくという事です。見つかった不足箇所の補強にあたっては、コンテンツ募集（参加型）も一つの解決策です。先ほど紹介したラジョンヘリのコンテンツは、参加型で住民の方から集めたものです。こうした取り組みによって、デジタルアーカイブの活性化も進むのではないのでしょうか。古文書も大事ですが、それだけにとどまらず、住民に開かれた公共図書館は、住民とともにデジタルアーカイブを発展させる使命があるのではないのでしょうか。以上です。ご清聴ありがとうございました。

(永田)

ありがとうございました。ここで休憩にしたいと思います。外には、お茶や水が用意されていますので、ご利用ください。

それから、お手元の封筒のなかに質問票がございます。質問がある方は、それにお書きになります。私どものほうにお渡しください。時間になりましたら、質問票を回収する者が、ドアのほうにおりますのでお渡しください。

それでは 20 分後に再開いたします。よろしく願いいたします。

ディスカッション

(永田)

それでは、時間になりましたので、再開したいと思います。ディスカッションを始めたいと思います。

少なからず質問を頂戴しているんですが、最初の私の話で申し上げましたように、ここで太田さんに、太田さんのなさっていること、あるいは今日お越しになって思いつかれたコメントなどを、お願いしたいと思います。

(太田)

図書館と地域を結ぶ協議会の太田剛と申します。一昨年このシンポジウムに呼んでいただいて、ソーシャルイノベーションとか協働ということについてお話しさせていただきました。今回のシンポジウムの準備が始まるころに、永田先生に今回は「ランドスケープ」でいくとお話を聞いて、これはまたチャレンジingなものを選んだなとずっと思っていたのですが、文字面だけとって「景観」だけの話にすると、意外と世界は広がらない。けどいったん「ランドスケープ」に「図書館」をくっつけて、「図書館を巡るランドスケープ」といって、図書館を巡るいろいろな状況や課題をそこにに入れていくと、今度は広がりすぎてなかなか収集つかないのかなど。ここでいう「ランドスケープ」はどういう切り口で、どんなふうなことをいって、どんな形で落とし込んでいくかって、結構難しいなと思って今回は聞いていたのですが、ま、今回は第一に伊藤麻理さんの建築からみたランドスケープ、それから、森山先生のデジタル情報、インフォメーションランドスケープっていうところで話をもっていかれるのだろうかかと想定しながら聞いていましたが。

伊藤さんの話のなかでもあったと思いますが、普通は建築家さんがいう「ランドスケープ」の考え方は、「景観」ということになると思うのですが、もう少し図書館というものに引き寄せたときに、そこに込めたいニュアンスってきつとあると思うんですね。そういったときにものすごく似ている言葉で、「観光」という言葉がある。景観の「観」に「光」と書いて観光。光を観る。この「光」ってなんですかね。観光、観光っていつてますけどね。今は観光っていうと、なにかつまらないゆるキャラが出てきてグルメやってってなっちゃうんですけど。本来の観光って意味は違うんですね。あの光って「クニ」からきていて、「クニ」に光を照らすということなんですね。ときの権力者が高台にのぼって下々の人たちがどういう生活をしていて、どういう土地に力があってということ。このときの「クニ」って、昨日天皇陛下がパレードやられましたけども、そのナショナルリズム的につつまらない話になっちゃうんですけども、そうじゃなくて、もっと愛郷心っていう。里という意味での「クニ」というものとして、そこ土地の力を観る。そういったものが観光の「光」なんですね。そういうときに、図書館とランドスケープっていうときに、景観じゃなくて、その土地土地のもっている「光」を観る、それを図書館にどうもっていくのというところまで広げると、ちょっとおもしろい議論になってくるかなと思います。

そのときに、伊藤麻理さんがおっしゃっていたように、建築家さんというのはいろいろな事を考えてその土地のあり方、もちろん物理的な地面の傾斜だとかいろいろな事を考えるでしょ

う。それと、その駅との関係とか商店街との関係とかいろいろな事を考えてつくっていきます。今回紹介していただいた梶原町立図書館、雲の上の図書館とっていますが、建築家は隈研吾さん。隈研吾さんのコンセプトというのは、溶ける建築とか負ける建築とおっしゃっていますけども、完全に外からみると、自然景観に溶け込んでいます。そこが大したものだなと思うんですけども、そのときに、建築家さんがいろいろ考えて、なかで工夫したこと。それから梶原の場合は、前の町長さんの意向がものすごく強かったので、その町長さんの意向をくみ取って、それから地域の人がどういうことを考えているのか、働く人たちがどういう人たちなのか、そういうものを全部受け取って、最終的には運用に渡していくんで、その橋渡しをコーディネーターといわれている僕なんかがやっていることなんですけども。じゃあそのときに、なにをもってそのランドスケープといっているものを、この図書館のなかで組み立てていくのか。そこにはもちろん、運用だとか、その土地の「光」、そういうものをどうやって、選書から、分類から、それからルールづくりから。例えば梶原の場合は町長さんが「町民の人たちに、ワインを傾けながら、ここでまちの将来を語って欲しいんだ」というすごく強い想いをもってらしたんで、そういうラウンジを一番上につくって、利用者が自由に使えるようにして、飲食自由にしてお酒も OK にして、持ち込み OK にしてっていうような空間づくりからルールをつくっていくというふうに行っているんですけども。まあそうしたときに、ランドスケープといったときに、情報のインフォメーションスケープもあるんですけど、もう一つマインドスケープというようなことを考えなくちゃいけないかなと思っています。

昔、岡崎市の岡崎市美術博物館で、中身全部をコーディネートする仕事に関わったことがあるんですけども、マインドスケープミュージアムというものをつくりました。その土地土地の人たちがその地域なかでもっている、いわゆる物理的なスケープじゃなくて、マインドスケープ、もう一つ心の、心象的な風景があるんじゃないか。そのなかには必ず物語があって、地域の物語があって、それをどうやって運用から、選書から、分類まで込めていくのかっていうことを、組み立てていかないと最終的には図書館、本当の地域のためのよい図書館にはなっていないんじゃないかなというのがあります。

そういう意味では今回、半年ぐらいですか、伊藤麻理さんと一緒に那須塩原の図書館お手伝いしていました、アドバイザーで入って。市民の人たちのつくった本当にいい基本計画があるんですね。それを建築家として伊藤さんが解釈して、あそこまで形にしたのだけでも、それが運用につながらない。残念なことに。建築は建築家さんが都市整備課さんと組んでぐいぐい進めていくんですけど、建物ができ上がると運用になって、生涯学習課さんに引き渡される。その運用を引き渡された側があんまりやる気がない感じの事が多々あるんですね。昔のスタイルの、指定管理丸投げのような既存図書館があって、それをそのまま移行するだけのプランしか出てこないとか。例えば建築側が基本計画からああやっていると、アクティブラーニングの空間を用意する。あれ運用するとなると大変ですよ。誰がコーディネートして、誰がファシリテーションして、どうやってあそこの場を動かしていくのって考えると、いろいろやんなきゃいけないことがあるんですけど、結局、なにもしないっていう運用プランになってしまう。最近多いのは、防犯カメラの議論ですね。さっきの伊藤さんの設計もそうでしたが、小さいスペースがいっぱいあるじゃないですか、子どもがひそめる。そういう時に、死角になるか

ら防犯カメラつけるとかいう議論になるんですね。みえないところには防犯カメラをつけるってね。挙句の果ては、トイレの出入りまで防犯カメラで全部チェックするとかって、ホントに椅子から転がり落ちそうになることがあります。結局マインドスケープってなにが支えるかという、利用者と地域の人と図書館の、運用側との信頼関係だと思うんですね。

さっき永田先生からアフォーダンスって言葉がありましたけど、アフォーダンスってすごく大事な言葉で、わかりやすいというと、コップを取ろうとしたときに、手がコップの形になっているんですね。先に手がコップの形になってコップを取る。これがアフォーダンスなんですけど。図書館に行く時に人というのは、図書館に入ったときにそのアフォーダンスができているか。多くの図書館は万引き防止のことばかり考えていて、信頼関係がないですね。こいつ盗むんじゃないかっていうつくりになっていたり。それでそういうマインドスケープができるんですかねって僕はいつも思ってるんですけども。じゃあそういう信頼関係に基づく、マインドスケープができて、マインドスケープができた図書館では、そういう万引き率はぐっと下がるんじゃないですか。実際に幕別町図書館、梶原町立図書館もそうなんですけど、全く万引き防止対策は行っていません。キンコンキンコン鳴るような高い機械はいれていません。でも、ほとんど万引きないですよ。ほとんどなくなってないです丸1年。幕別はもう7年やっていますけど、ほとんど。要はそういう空間ができていのかどうかという話なんじゃないかなと思います。

それからデジタル化の話、これもものすごくこれから大事な話なんだと思います。インターフェースをどうするかという話から、情報構造、分類等。僕も慶應大学では、ネットワークコミュニケーションというのをずっと教えているので、どっちかというところとそっちが専門なんですけど。かつては長い間、アノテーションだの、コノテーション辞書とか、文脈型検索エンジンとか、オブジェクト指向だとかエージェント指向とか。いろいろなものを駆使してどうやって検索の、いわゆる今日のお話だとランドスケープをつくるかという議論をしてきました。そのときに、デジタル社会になってネットワーク社会になって一番大事なものは、そのランドスケープの範囲をどうみるんですかという議論を散々してきました。そのときによくいていたのが、ゴーンと鐘を鳴らして、お寺の鐘が聞こえる範囲が、コミュニティの範囲だよなと。じゃあデジタル社会のそのお寺の鐘ってなんなんですかと。それは僕はたぶん分類からとか、だけのアプローチでは出てこないんだと思っています。ネットワーク上でゴーンと鐘を鳴らしてそれが響き渡る世界のなかで、さっきまさにおっしゃられたボランティアな形でみんなで情報をつけていく。だいたいシステム系のデータベースの話になると、特にキーワードをつけるとか、アノテーションとかコノテーションという話になってくると、形態素解析とか出てきて出口がなくなっちゃったりするんですね。そのときに **Wikipedia** 型とかあると思うんですけど、知の交換の場というのをどうやってつくっていくかってことが大事になるんだと思います。なので今までのあらゆるメディアとデジタルネットワークになってなにが一番違うか。今のデータベースって情報があるものしかストックできないんですね。ところがネット社会、デジタル社会の最大のポイントって、ない情報が出せる。前は情報をもっている人しか語れなかったのですが、ネット上は、「私、情報ないです」、「ここ情報ないです」。で、差し出すとみんながそこに入れてくれる。そのときの信頼の範囲は、さっきいったお寺の鐘がゴーンと

なって届く範囲だと。

じゃあ図書館を核にしてそういう情報ネットワークのランドスケープがどうつくり得るのかというのが、これからの課題かなと思って聞いていました。そのときに、さっき江戸の絵図が出てきましたが、あれ富士山が真ん中にある絵がありました。なぜああいう描き方になるのか。あれが実は、日本のコミュニティのモデルなんですよ。山があって川があって、あれ「海山里モデル」って呼んでたんですけど。山に神が降りてくる依り代（よりしろ）があって、川の分かれたところに水回り（みくまり）があって、そこに御仮屋（おかりや）を置いて、そして奥宮、中宮、本宮があって、もう一つ海のほうからやって来る神があって、奥津宮、中津宮、辺津宮とかあって、それを里にお招きして、魂振り（たまふり）してまちのなか歩いていくのが御神輿で、日本の「海山里モデル」なんですね。そういうような、土地それぞれの物語っていうのを、もう1回それぞれの物語を、図書館という空間でどうやって、分類だけじゃない方法で、情報の基盤に敷いていこうかということ、ランドスケープって意味では考えていかなければいけないかなと。もちろんそういう昔ながらの「海山里モデル」だけではない、なにかそういったモデル、十進分類法だけではない。あれは、前々回のシンポジウムでも聞かれた方はよくわかっていると思いますけど、僕はあまりNDCって好きじゃないんですね。世の中のものを全部10個に分けられるってなんという横柄な考え方なのかって思うんですけど。そういったら、前のシンポジウムでも何人かの人に叱られたんですけど、図書館はそういうものじゃないって。まあ、十進分類法は大事だと思います（笑）。

それとは別にもっと可変性・多層性のあるものをどうやって取り入れていくかということが大事だと思います。そのときに、私が今一番注目している言葉が「レジリエンス」という言葉です。元々は環境学とか生態学とか、もう一つは心理学のほうからも来ているんですけど、なんていうんですかね、折れにくさ、回復力などというふうに訳されているんですけど、例えば、木って雪が降ってくると枝が折れますよね。だけど竹はたわんで折れないですよ。そういう回復力とか、折れにくさ、そういう強さ、柔軟性とも訳されているらしいんですが。そういう強さをこれからの地域づくりに、持続可能な社会、SDGsとかいっていますけどもね。これからの持続可能な社会づくりで今もう1回注目されている言葉なんですけども、図書館が、地域のなかの図書館という限りは、図書館そのものもどうやってそのレジリエンスをつくっていくのかというのが大事になってくるのかなと。そのときに今日のランドスケープだとか、情報のコミュニケーション、インフォメーションランドスケープ、そういう話が、ボディブローのように効いてくるんじゃないかなと思います。ということで、ありがとうございました。

（永田）

ありがとうございました。いろいろ示唆に富んだご発言をいただきました。

ディスカッションですが、いくつか質問が来ています。ランドスケープという言葉がどうもしっくりこなかったという印象をもった方もいらっしゃるようです。ランドスケープとは一体なんなのか、あるいは情報のランドスケープということがもう一つ腑に落ちていないという印象があります。基本的には最初にお伝えしたような意味なんですけども、私どもは、景観をみて、その形態を認識するだけではなくて、そこに含まれた意味を直感的にわかるんですよ。それが素晴らしい、ああいいなとなると、そのランドスケープにのめり込んでいけるとい

うわけですね。図書館の建築を伊藤さんたちがつくる時に、いいランドスケープをつくろうとする。そのいいランドスケープをつくろうとする過程を今日のご説明いただいたわけです。伊藤さんにいろいろな質問が来ています。

森山さんのほうの話は、少し技術的な話が多かったので、馴染みのない方がいらしたと思うんですが、実はとてもとても大切な話ですね。これからデジタル化社会になっていって、ランドスケープが直感的に、視覚的にみえない状況になっていく。そういうときにどういうふう
に、図書館は工夫して情報を届けるのかという話です。ただし、分類の話があって、NDCの話
があって、それからシソーラスの話があって。実は今図書館で働く方もそういったところに対
して大変疎くなっているので少し難しかったかもしれません。また、公共図書館では太田さん
がなさっているようなユニークな形での配架、つまりコレクションのランドスケープづくりが
あって、そういった工夫に公共図書館は留意しなきゃいけないけれども、デジタル化資料にな
ると必ずしもそうはいかない。ある程度標準的な、誰もが思い浮かぶようなものが（もちろん
太田さんのものも誰もが思い浮かぶところを根拠にしているのですが）必要です。そこでは、
広い流通性を求められますから、国際的な標準だとかを取り入れた、かなり技術的な話になり
ます。そういう意味で慣れてない方にはつらかったかと思いますが、実は大変重要な話でもあ
ります。

では、質問にお答えいただきます。どちらからいこうかな、「情報のランドスケープは、情報の
のありか、それを取り巻く構造という理解でよいですか」という質問が来ていますが、どうで
すか、森山さん。

(森山)

そうですね、情報のランドスケープを、情報の分布状況とイメージされているのかもしれない
ですね。私のイメージとしては、定義のところでお話したように、まとめりですね。情報を
フィルタリングしたときに再現されたまとめりを、情報のランドスケープと捉えているので。
必ずしも分布状況というものはまた違うかなと考えています。

(永田)

ありがとうございました。森山さんにはおっしゃりたいことがあったんだと思うのですが、
ご質問された「情報のありかですか」という質問には「そうですよ」と、まずそう答えたほう
がわかりやすいかと思います。ただ、そのありかをどういうふうにつかまえるかということに
対して、今のような森山さんのお話があるわけです。まさに情報のランドスケープというの
は、情報のありかを直感的につかまえられるような景観を示すといったほうがわかりやすい。

ついでに森山さんに「デジタル岡山大百科の到達点と今後の方向性についてご教示くださ
い」という質問が来ていますが、どういうのがありますか。これにお答えいただけますか。

(森山)

到達点、他館が見習うべき点、今後の方向性についてのご質問ですね。ただし、私はもう担
当者じゃないので、これまでどのようなスタンスで取り組んできたかをお話することによっ
て、回答に代えさせていただければと思います。

私が任された時期は、試行錯誤がかなり許容された時代だったんですよ。90年代、2000年代
初頭ですね。自分でまずは考え、実証実験から始まりました。デジタル岡山大百科ということ

で、岡山のことはなんでもわかるようにするはずが、最初のころは、分類を通したランドスケープ機能によるチェックをしたときに穴だらけだったんですよ。お前これどうするんだと、県内をカメラかついで歩くのかと上層部からいわれて、つらい思いをしたんですけど、そこで思いついたのが郷土情報募集事業です。すべて自分でやるんじゃないで、住民の参加型でやる。こういうことを繰り返しひねり出してやってきました。他館が見習うべき点というところでは、「必要は発明の母」という言葉がありますが、やはり自分で考える。他を真似るということではなくて、まずは自分で考えてみる。というのが必要じゃないかと思います。到達点とか今後の方向性というのは、やはりそのときそのときの時代の要請に応じていく、ということが必要だと思います。

(永田)

デジタル岡山大百科は皆さんネットでみることができます。ですからクリックしてみて、「へえ、こんなことやっているんだ」と、ご覧になっていただきたいと思います。公共図書館の一つのあり方として、大変ユニークなあり方だと思います。他の公共図書館はなぜこういうことをしないのかと思うくらいのおもしろい取り組みだと思います。

もう一つ伊藤さんのところへいく前に、「アクセシビリティ」というキーワードがありますね。「アクセシビリティ」というのはだれもが情報にアクセスできるということで、特に障害のある方のアクセスを保障することです。その「アクセシビリティ」に関する質問で、読みますと、「物への接近しやすさ、使いやすさ、情報の取得しやすさを考えるようになってきています。使いにくい、わかりにくいということのないように、当事者の目線で捉えていくことが重視されていると感じます。今回シンポジストのお二人のお話では、当事者がどのように関わっていくのかという視点が感じられませんでした。障害者だけが当事者ではありませんが、さまざまなニーズをもつ方々がどのようにすれば使いやすくなるのかは、どこで判断、担保されているのが気になりました。ご教示いただければ」ということであります。

重い質問です。私は今回のお二方がその観点をお忘れになっているわけでは全くないと思いますが、のちほど、機会を差し上げますのでコメントをつけていただければと思います。

それで、伊藤さんへの質問は、必ずしも情報景観のお話、あるいはランドスケープ一般の話ではありませんが、いくつか質問が来ています。一つずつお答えいただければと思います。「図書館のコミュニティづくりに関して、市民による自主的な活動、ボランティアグループの設立等は予定されているのでしょうか」という質問が来ています。どうぞ、お願いします。

(伊藤)

今、那須塩原市では、ボランティアさんがたくさんいるんですね。市民の活動を支援している会社があったりとか。活動がすごく盛んで。例えば図書館の既存のところという、児童図書のところでも読み聞かせをしているボランティアさんたちがいるんですね。そういった方々の活動はもちろん引き継いで、なおかつ、新たな活動をするボランティアさんも出てきているんですよ。今回の図書館をきっかけに。例えば、3Dプリンタがある部屋があるんですけど、そこであれば「僕たち3Dプリンタが大好きなので、グループをつくって教えます」という方がいます。つまり誰か支援する人を雇うのではなくて、市民のなかで得意な人たちが教えることで、教えたり教えられたりすることでコミュニティができていくので、そういう活動の場であって

欲しいとは思っていて、そういう部屋を用意したりとかしています。やっぱりそうならないと、継続しないと施設は死んでしまうと思うので、継続するためにはやっぱり地元の人たちが主役となって、活動しやすい場所をどうやって用意しないといけないというところで設計をしています。

(永田)

はい。よろしいでしょうか。

それでは次の質問に参ります。「実際に那須塩原市の図書館で働く方の意見など、参考にされた部分、あるいは設計に反映された部分はあるのでしょうか？働く方にとっては、作業のための動線などが重要になってくるかと思いますが、そういったところは考慮されていますか？」と、働く立場からなにか。

(伊藤)

黒磯図書館の方々にはすごく聴き取り調査の会合をしています。例えばカウンターを女性が使いやすい高さにするとか、裏動線で上下2階になっているので、垂直動線ですぐ作業できるような、エレベーターの周辺に作業場があるようにしたりとか、あとはですね、これだけの図書館だと、本棚もランダムに並んでいると、すごく死角ができていろいろ管理がしづらいという話もあったので、建築的な配慮としては、中心に来ると、360度見渡せるようになっているんですね。本棚が放射状になっているというのはそういう利点で、真ん中に来ると全体が見渡せるプランにはなっているので、そのへんで管理はしやすいという配慮をしています。あとは、どうしても女性が働く職場なので、女性に対しての配慮というのを結構していて、わかりやすくいうと足が疲れるのでというのがあったので、二重床にしてやさしいクッションタイプの床にしたりとか、あとは床下空調を徹底して、吹き抜けのところには床暖房を入れて寒さ対策をしています。やっぱり長期滞在になるので、足元があったかいということで、快適で心地よくて、働く人にとってもいいというのが基本的な床暖房とかクッションタイプの床にしたりだとかは、調査のなかで出てきたことなので、取り入れています。

(永田)

どうですか。よろしいでしょうか。すごいですね。私が昔、新しい図書館の設計計画に関与したときは、図書館屋と建築屋さんとはなんか敵対関係にありまして、建築さんはいいいデザインのものをつくりたい。図書館の方は働くのに働きやすい図書館をつくってくれなんて話で、なかなか話がうまく一致しなかった覚えがありますが、今は時代が変わりまして、伊藤さんのお話をうかがっていると、随分とお互いに歩み寄っているような気がします。

次の質問に参ります。伊藤さんへの質問ですが、「近くのカフェ、雑貨屋等にはどちらかといえば外の人（地元ではない人）が多く来ているように思います。そんな人たちにとって黒磯の図書館は興味を引くものになりそうだなと感じていますが、そのような外から来た人たちを巻き込む方法等はワークショップで出たのでしょうか」というものです。伊藤さん、意味がわかりました？

(伊藤)

そうですね。那須塩原っていうまちって、いわゆる那須は那須町なんですよ。その下のまちが那須塩原市なんですね。観光で外から来る方々って、ちょっと誤解されやすいんですけど、

観光地とは若干しか被ってないんですね。基本は那須町とか塩原町なんで。なので来る人って、観光に来た人が那須塩原の駅に向かうので、帰りにたまたま寄ったとか、そういった方が多いですね。ただ地元の人って、このまちは特になんですが、結構イベントをやってるんですよ。例えば宿とカフェを営んでいる方が中心となって、広場の前で夜市とかやって、東京の料理人を連れてきてなにかイベントやったりとか、結構活動的で、もうすでにそういった活動家がたくさんいるんですよ。なので、こないだやった交流センターのイベントなんかでも、すぐ2~3千人がすっと集まるんですよ、土日だけでも。だから呼ぶ力があって、それはやっぱりインターネットを通じて、いろいろなことを発信しているというのもすでにあるので、そういう方々が図書館の1階のフリースペースでどんどん活動をやりたいという話があるので、そういった意味では、場所さえ与えれば、変な言い方ですけど、場所さえあれば彼らがちゃんと利用してくれるというのが、ワークショップで垣間みれたんです。

あとは、重要なのはやっぱりルールなんですよ。運営者がしっかりルールづけをしていくという、本来であればしっかり議論されていかなければいけないと私は思っているんですけど、ルールって例えば、時間は何時から何時までですよとか、周りからうるさいとか意見が出てきちゃうから。貸し出すものはこれですよとか、電気代はこんなルールですよとか、本来は運営する生涯学習課の方々がもうやってかなければならないんですけども、やっぱり知識がないんですよ、打ち合わせして聞いています。だからやらない。そうなる、オープンしたとき絶対トラブルですよ。これだけの広さがあるんですよ、1階だけでも2,000㎡近くあって、1階全部を貸し切って広場もあわせると、5,000㎡近い平場を借りてイベントできるのに、なんのルールもつくらなかつたら絶対トラブルですよ。そういった準備をやっぱりやるべきなんだけど、しないなあっていうのを、はたからみえますね。だからトラブルんだろうなあってやっぱり思うんですけども。そこがすごく悲しいなあと思いながら。

でも市民の皆さんのほうがよっぽど勉強されていて、自分たちでルールをつくってなにかやろうっていう活動すらどんどん出てきているので、私はやっぱり強制的に「こうです」って役所がやるのではなくて、市民の力をもうちょっと引き出して、市民の方々にルールをつくって、「はい、やってみましょう」っていうのをもっとやってもいいのかなっていうのは、はたからみていて思っています。どうしても設計者なので、ああだこうだやっぱりいけないんですね。ただ、設計者っていろんなところでワークショップやったり設計やっていると、実はすごく情報をもっていて、成功しているまちはこんなことやっているんだよっていうんですが、なかなかやっぱり勉強しっかりする行政とそうじゃない行政と、課によってもかなり違うのかもしれないですがあるので、なんかもう少し情報交換できればいいのになというふうにはすごく思っています。

(永田)

はい。大変おもしろい話ですね。ここに集まっていらっしゃる方は図書館で働かれている方が多いのですが、同時に行政の方もいらっしゃいます。図書館で働かれている方は行政の意向に左右されて、ときにいい場合もあれば、かなり困った場合も、そういったことをご経験されていると思います。図書館の議論をすると必ずやこの問題にぶつかりまして、要するに市民というか住民が主体なのですが、行政がその住民の代表権をもっているような形で規則などをつ

くって、この言い方はちょっときついかもしれませんが、抑え込むような場合もあります。このあたりはどうも、今後の日本社会の成熟の問題なのかなというふうに思います。もう一つ伊藤さんが示唆されたなかで非常におもしろいことは、市民の人たちが自分たちでルールを考える、実は市民も必ずしもいい主体者ではないこともある。ずるいことする人もいるし悪いことする人もいる。そういった余剰をどうやって防いでいくかは、行政のように明言すればいいわけではない。市民どうしのなかである程度お互いにそういったことを防いでいくような約束が必要なのだと思います。そのことを伊藤さんはルールとおっしゃっているような気がします。この点はぜひ頭に残しておいたほうがよいのかなと思います。

ヘルシンキの写真を出しましたが、ヘルシンキのような都市が、ああいった図書館をつくるのに10年近くかけている。その間に市民たちが、本当に市民たちが参加してつくっている。約1万平米の図書館ですけども、BDS (Book Detection System) ありません。そんな必要はないと彼らはいつています。そういったいわば、社会的な信頼性が高い社会ではやりやすいなと思いますね。

もう一つあります。伊藤さんに、「新しい図書館のサービス指標としてどんなものを評価基準にされる予定ですか。それは設計者の意図と合っていますか」というようなちょっと難しい質問が。

(伊藤)

今ですね、那須塩原市の図書館で提案しているのが、図書館の評価って来館者数ですよ。何人きました、みたいな。「で？」ってこっちからすると思っちゃうんですよ。正直な気持ち、これちょっと一市民みたいな言い方ですけど。「何人来たか、だからいい図書館ってイコールじゃないか？」って思うんですよ。で、今私たちが提案しているのは、SIBを入れたらどうかという提案です。SIBってなにかというと、Social Impact Bond。イギリスが発祥でもともと医療機関とかでやってるんですけども、例えばわかりやすい例でいうと、糖尿病の方が検診をすることで、そのまちに糖尿病の患者が減りました。そうするとまちが負担する医療費が削減されますよね。それがまちにとって大きな視点でみると医療費削減で個人の負担が減るでしょっていうことなんですけども。そういうのってアウトカムを評価してるんですよ。だから、何人きたからいいというんじゃないで、そこで市民が活動して、活動した人たちがまちにどんないいことを起こしたか、みたいなことを評価にしたらいんじゃないのってことを提案しています。何人来たからって、じゃあこのまちがどれだけ活性化したってならないですよ。

そうじゃなくて、どんないいことが起きたか。もしかするとそこで活動した人が、例えば海外に出て有名人になったとか、わかりやすいところでいうとそういうことでもいいですし、なにかここをきっかけにして、新しいステップを踏んだ人がどれだけ出てきたとか、せっかくそういう場所をつくっているのに、そういう人が生まれないのを評価してもしょうがないじゃないかって提案しています。ただ、こんなSIBを入れる図書館というのはなかなかないので、もちろんハードルは高いんですけど。ただ、「そういった提案って設計者がするのかい？」ってすごく思うんですけど。なんか役所にきかれるから、「こんなのあるよ」ってそういった提案をして、「ああそんなのあるんだ、じゃあ今度話聞いてみよう」ってなるんですけど、なんか甚だ不思議だなと思いつながら。でもどうしてこんな一生懸命やってるんだっていったら、わか

りやすいんですけど、自分がつくった建物が悲しい状況にはなって欲しくはないので、知っている情報は全部提供しますっていうのはやっています。

さっき太田さんがいった、ちょっと話変わっちゃうかもしれないんですけど、マインドスケープって私もすごくそれ感じるんですけど、ちょっと変な話なんですけど、BDSをつけるかって話が出たんですね。黒磯図書館にはないんですね。新図書館はいい本いっぱい入れるから、なくちゃ困るからつけようって話になって、建築家としてはつけようってなっても入口に電源取ればいだけだから、いいですよっていうふうに話をしてたんですね。すごくその議論していて、BDSって1,000万するんだよねって、結局買えないですよって話になったんですよ。まあいいんですよ、そういう話に振り回されるのは。でもそもそもの議論で、素朴な疑問を出したんですよ。「1年間でどのくらい盗まれるんですか」ってきいたら、だいたい100万くらいなんですよ。「BDSいくらするんですか」ってきいたら、だいたい1,000万なんですよ。「だったらいらなくない？」ってすごく思うんですけど、そういう素朴な疑問すら、なんかなにも考えないで「BDS神だ」みたいな議論をしているのが、すごく不思議だなといつも聞いているんですけど。なんかこんなこといっちゃいけないって思うんですが、こういうことも、先ほど太田さんもいったマインドスケープだなあって。盗まれている状況は悪いと思いますよ。悪いけど、それを維持するのにこんなにお金かかるなら、信頼関係でもう少しやってみてもいいし、盗まれたっていいじゃん、100万くらいならって思っちゃうんですよ。まちの負担がそれだけ下がるわけじゃないですか。差額900万円。900万円でもいい本入れてあげたほうがよっぽどまちのためになりませんかって話をしたこともあります。本が買えない買えないってずっとしているんですよ。いい本をその差額分買えるじゃないかって素朴な疑問を投げたことがあるんですけど、なんか打ち合わせをしているといろいろ気づくことがあるなって思います。

(永田)

はい。ありがとうございます。あのSIBの話というか、一昨年太田さんがご登壇いただいたときのソーシャルイノベーションのような観点というのが、図書館など、われわれのコミュニティを維持するための議論には非常に重要な話です。また、図書館もそういったソーシャルイノベーションの機関として活動していることを、建築家の伊藤さんからも指摘されたようなものです。

ちょっと森山さんに、先ほどの聴覚障害者の方のアクセシビリティの話ですが、情報のランドスケープのお話のなかで、森山さんがアクセシビリティをどのようにお考えになっているか、ちょっとコメントをいただいてもよいですか。

(森山)

はい。先ほどのご質問というのは、聴覚障害の方のアクセシビリティに対して、どのような配慮がなされているかということですね。それについては、地図ツールの活用によって展開したランドスケープ画面のメタデータのうち、「唐子踊」の映像コンテンツに、括弧して字幕付きという言葉が付け加えられているものが該当するのですが、その映像コンテンツでは、音声が出るのに加え、画面の下の方に字幕が付いております(図10参照)。字幕を付ける作業をボランティアの方をお願いして取り組んでいただきました。

(永田)

アクセシビリティという観点は、大変重要な話で、法令ができたからではなくて、常に意識されなければならないところです。特にデジタル化が進んでいきますと、そういったものと組むデバイスの範囲が広がってきますので、経費の問題があるとしても、いいアクセスの方法を実現できるかと思います。

ランドスケープの話がちょっとみえにくかったと思いますので、最後にこのスライド(図18)をみていただければと思います。これは議論の論点を挙げたものですが、図書館がこういった観点でみたときに、皆さんの図書館が十分なものであるかを少しお考えいただければと思います。もし図書館がオープンで歓迎するような雰囲気をもっているとしたら、いいランドスケープがあるといえます。あるいは図書館では安心して心休まるというような状況があれば、いいランドスケープが設定されているといえるでしょう。図書館は学習の意欲をもたせてくれたり、あるいは仕事がそこでうまくはかどったりということが可能ならば、その図書館はいいランドスケープが設定されているわけです。あるいは提供されているサービスが容易に把握できるかどうか。容易に把握できるということは意外と難しいことですよね。図書館に入ったときに入口でランドスケープをみて、どこになががあるかというのがさっとわかりますか。そういった物理的あるいは情報的に指示が出ていますか。それから、図書館から「知識の世界」全体が見渡せますか。これはちょっと難しいかもしれません。でも森山さんからご説明いただいた情報のランドスケープというのはこれですよね。知識の世界というのは必ずしもそこだけではなくて、世界につながるようなネットワーク、あるいは世界につながるような情報像がないとつかめない。図書館はそういうものを用意してくれているのか、今後の図書館はそういうものを用意していくようにしていかなければいけない、ということです。

あと少しになってしまいましたが、私がしゃべりすぎたかもしれませんが、質問したい方がいらっしゃるといことで、ちょっとマイクを用意いたします。

はい、お願いします。

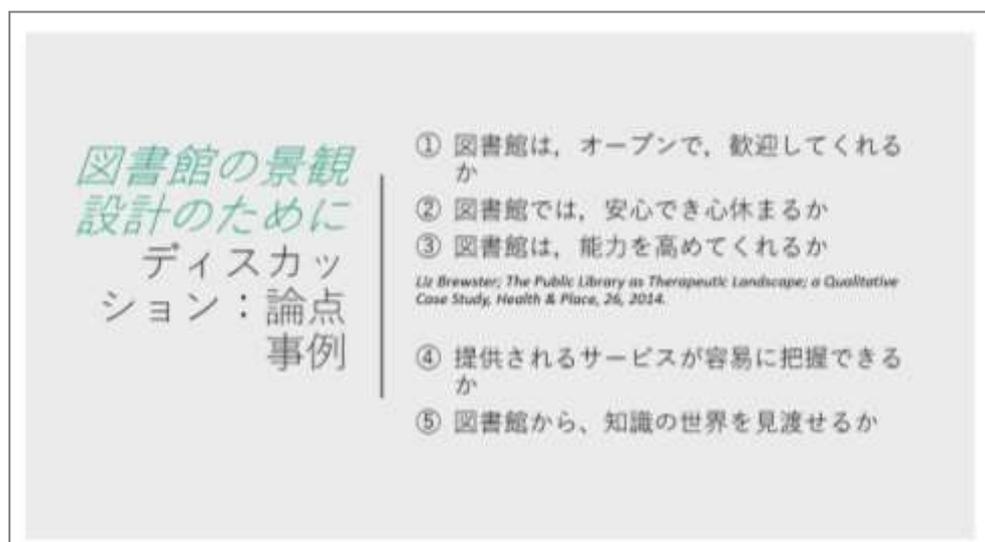


図18 ディスカッションの論点

(質問者)

昨年も、3年続けて参加させていただいております、ソーシャルイノベーションをいただいたときには、私は練馬の図書館を利用している者ですけども、ソーシャルイノベーションというものをどういうふうになかの図書館でやっていこうかという話を伺いました。そして今回はですね、図書館とランドスケープというテーマをいただいて、さあこれをどういうふう理解してどういうふう展開していくか。特に私は練馬区に住んでいて、この日本の図書館というものが、欧米と比べて全くこう、利用者も、それから提供する側の役所といえますか、自治体の姿勢も、全く違うんですね。一方利用する側も要するにただの貸本屋だと思って利用する人たちが、これが私にとってはいわば古典的利用者が、います。それで去年出版された『挑戦する公共図書館』というのが出まして、これを今取り組んで、これを練馬区長、それから区の教育長、それから区の図書館関係の課長クラスに届けています。

それで、ランドスケープというのを考えてゆくと、図書館の建物というのはつくったときが一番立派なのです。ですが、公園などだと、この日比谷公園もそうだけでも、つくったとき植えたときはみずぼらしいけれども、歳月を経るごとにさらに立派になってくる。図書館もそういう意味でランドスケープといったときに、時間の変化を、うまく利用者が、あるいは提供する側と一緒に、よりよいものに仕上げていく。そうすると今、設計事務所で考えられていたようなことが、本当に時代につながってゆくのかどうか。例えばこの図書館も、東京都は昔この図書館（旧東京都立日比谷図書館）を通じてどんどん新しいことを発信していたわけ。私は全盲なので、図書館で朗読サービスをやっているのですが、ここはその発祥の地ですよ。

時間ですか。そういうようなことをまた考えてやっていこうかと思えます。ありがとうございました。

(永田)

すみません。時間がきてしましまして、すべてをおっしゃっていただくことができませんでした。またご意見をお伺いする機会をつくりたいと思えます。

それでは、少し超過しましたが、皆様のご協力によって、これにて本日のシンポジウムを閉会させていただきたいと思えます。ありがとうございました。改めて、お二方に拍手をお願いしたいと思います。また、ご質問、ご発言いただいた方に拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。